富山大学 教養教育院

令和3年度第３回

FD活動報告書

Faculty Development Report

FD REPORT

Liberal Arts and Sciences at **University of Toyama**

目　次

はじめに・・1

パネルディスカッションでの議論と質疑応答の要約・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

三重大学の先生方への追加質問とその回答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

参考資料
・FD 研修会での説明スライド
・開催要項
・参加状況
・参加者アンケート

はじめに

令和 3 年度第 3 回教養教育院 FD 研修会「先進事例に学ぶ教養教育～PBL と異文化理解～」を2月2日にオンライン＋対面のハイブリッド形式で開催しました。

この FD 研修会の前半では，教養教育において PBL を広く展開している三重大学から 4 名の先生を講師として招き，PBL を導入した教養教育の全容と各授業の概要についてのご講演を頂きました。三重大学の PBL 授業の中心となっているのは，1 年生前期の「スタートアップ PBL セミナー」と後期の「教養セミナー」という全学必修科目です。それらには，丁寧な授業設計に基づいた高度なアクティブ･ラーニング形式が導入されています。その授業内容や運営を含め具体的な PBL 授業の実際を説明して頂きました。また，三重大学ではグローバル化に対応できる人材の育成を目指した「異文化理解」という科目を初修外国語に代えて導入しており，そのコンセプトや授業の実際についても別建ての講演で紹介して頂きました。それら全てのご講演の発表スライドを本報告書に示しています。ご覧頂くことでご講演の概略を把握してもらえるものと思います。

FD 研修会の後半は，講演者の方々をパネラーとしたパネルディスカッションとしました。そこでは，三重大学の教養教育院の組織，PBL 科目の授業運営と成績評価，異文化理解の導入経緯等についての質疑応答を行いました。このパネルディスカッションでの議論と質疑応答について，教育改善検討 WG で要約を作成し，本報告書に示しました。その要約には，前半の講演内容からさらに踏み込んだ PBL 科目の運営の実際が示されています。また，FD 研修会当日にお聞きしきれなかった質問事項について，講演者の先生方に後日お問い合わせをしました。それらの質問と回答についても，本報告書に示しております。

本報告書には，教養教育科目において PBL 科目を導入するためのとても有益な情報が示されています。是非ご覧ください。

教養教育院教育改善検討ＷＧ座長
彦坂　泰正

パネルディスカッションでの議論と質疑応答の要約

― 数々の優れた企画を可能にした三重大学の教養教育院の組織や役割意識について教えてほしい。

（綾野先生）部局相当の組織と教員の所属意識と教育に対する意識が重要。三重大学の教養教育院は，2014 年新カリキュラム発足に向けて学部相当の部局となった。院長が学部長に相当し，執行部となる企画運営会議は院長，副院長（副学部長相当），部門長（学科長相当）2 名の合計 4 名で組織される。この下に，専任教員と学部から異動してきた専任教員で構成される教授会がある。授業運営に関して非常に重要な役割を果たす 9 名の特任教員がいるが，教授会には出られないので，全ての教員が集まる教員会議を教授会の前に開催している。そこで様々な情報共有を行うことにより意識が醸成されている。

アクティブ・ラーニング推進室と外国語教育推進室も設置している。前者はスタートアップ PBL セミナー，教養セミナー，PBL セミナーを，後者は英語と英語特別プログラムの部会を統括し，運営している。また，企画運営会議の下に，教養教育情報室を設置しており，その室長は，企画運営会議・執行部会議にも出席している。教養教育に関する様々な情報を集め，分析している。それらに基づいて，いろいろな企画・組織的な運営が行われてきた。

（井口先生）この組織は 2011 年当時の学長提案にもとづいて作られ，共通カリキュラムも全学で了承されている。教養教育院はそれに基づいて運営を行っている。

（司会）三重大学の教養教育院の構造は，富山大学とそれほど違わない印象を受ける。PBL や単位数の共通化が全学であらかじめ了承されており，それを進める権限が与えられていたので企画できた，という理解でよいか。

（山田先生）理念を共有していることが非常に大事。「スタートアップ PBL セミナー」と「教養セミナー」は何年もかけて理念や方法を検討してきた。全学の PBL も役員全体で理念を共有しながら進めてきた。理念を進める人と組織が一緒になって話が進むものと改めて思う。

― 教養の授業担当の人員をどのように確保しているのか？各学部の教員の協力を得ているのであれば，どのような方法やシステムで協力を依頼し実施しているのか？

（綾野先生）元々は一般教育時代に各学部に定数があり，その定数に基づいて各学部から出動していた。その後，教員定数に基づく応分の負担と，教員数，学生数，単位数に基づく全学出動により，各学部から出動していたが，現在では，応分の負担と全学出動をまとめて，必要開講コマ数としている。毎年，全学レベル

の教育会議で必要開講コマ数を提案し，各学部からの出動コマ数を決めている。この会議は，教育担当理事が議長であり，各学部の部局長と教務委員長，教養教育院からは院長と副院長が出席している。各学部からは，出動だけではなくカリキュラム運営への協力も得ている。教育会議の下に教養教育院長が議長の教養教育専門会議を置いている。そこに各学部に所属している授業担当教員の代表が出席し，情報を共有するとともに，具体的な運営について様々なことを決めている。次年度の開講に関する計画書の依頼も，教養教育専門会議を通して行なっている。

（井口先生）教養教育院ができる前は全学の共通教育は全学で担当していたが，責任体制がはっきりしないため，その運営のために教養教育院を作った。核になる「スタートアップ PBL セミナー」と「教養セミナー」は教養教育院の教員が担当し，他の科目は従来通り全学で担当する。ただ専任教員 17 名だけでは「スタートアップ PBL セミナー」と「教養セミナー」はこなせないので特任教員を雇用している。

（司会）「特任教員」とは，どのような立場の教員か？

（綾野先生）特任教員は常勤ではなく，時間で採用している非常勤である。週 31 時間の勤務時間の中で授業を担当してもらっている。雇用形態が非常勤なので，教授会の構成員ではない。

― PBL 授業は非常に充実した内容だが，学生や教員の授業負担の増加をどのようにしてコントロールしているか？学生は週 4 時間くらい授業時間外学習をしていると示されていたが，学生が忙しくなり過ぎたりしないか？

（綾野先生）学生の授業負担のコントロールはなかなか難しい問題であり，各教員に任せているのが現状である。教養セミナーも同様で，学生達に課題を際限なく与えることもできるが，そこは各教員に任せている。設置基準からは，講義科目の 2 単位に関しては事前事後で合計 4 時間学習するように求められているが，現状は一応適正な範囲内に収まっている。

教員の授業負担についてであるが，教養セミナーの報告の中であった書評について 1 クラス 35 人分を評価することを考えてみる。1 つの書評が大体約 2000 字で，私の場合，それを読んでコメントをつけるのに大体 20 分かかる。35 の書評全てにコメントを付けるとほぼ半日かかることになる。ただ確認するだけでも 3 時間ぐらいはかかる。その授業を 6 クラス担当している特任教員に至っては，相当の時間数を費やすことになる。そのコントロールをどうするかはなかなか難しい問題であり，教員の裁量に任せているのが現状である。

―スタートアップ PBL セミナーと教養セミナーのようなアクティブ・ラーニングを実施する科目において，どのような評価尺度でその能力を測るか？

（長濱先生）自律的・能動的な学習者になるという目標は 1 つの科目だけで到達できるものではなく，4 年間通しての目標。そのため，その科目だけで目標の達成を直接的に評価はしていない。代わりに，アクティブ・ラーニング科目全体を通して，最終的な成果だけではなくプロセスの部分も評価する。それにより，自立的・能動的な学習を評価していることになる。評価する観点は自ずと複数になり，一人の学生を多様な側面・観点から評価するという形になっている。

スタートアップ PBL セミナーでは，最終成果物として自分たちのプロジェクトをレポートの形でまとめさせる。レポートの質的な出来を評価するだけでなく，毎回の課題等の提出物の内容と授業中のグループでの活動の様子等も評価し，結果とプロセスを加味した評価をしている。

（井口先生）教養セミナーについては，読者シートと書評とグループ活動についてそれぞれ 30%，40%，30%と取り決めをしている。書評とグループ活動ではピア評価をしており，それを参考に教員が最終評価をしている。グループ活動への貢献はどうだったか等から，自律的能動的学習力が評価される。細かくどう評価するかは厳密には決めず，教員に任せているところがある。

（綾野先生）。三重大学では教育目標として“4 つの力（感じる力，考える力，ミュニケーション力，生きる力”を掲げている。そこで，毎学期に学生に対して行なっている修学達成度調査では，“4 つの力”の伸び具合とどのくらい“4 つの力”がついているのかを，各項目に分けて学生たちに自己評価をさせる。それを集計し,各学生が自分の“4 つの力”の育成の状況を見られるようにもしている。全体の状況は，教育会議で各部局に結果が示され，部局に持ち帰って分析・検討している。

－スタートアップ PBL セミナーは 37 クラス開講ということだが，異なる教員の間での評価の統一はどのようにされているか？

（長濱先生）評価用のエクセルシートを部会で作成している。例えば，各回の課題について幾つかの項目と配点を決め，各担当教員が学生一人ずつに対して入力していく。それを集計して最終の評価にしている。

－成績評価には秀・優，良・可・不可の 5 段階評価と合格・不合格だけの評価があるが，PBL 型授業において 5 段階評価は可能なのか？富山大学では各科目の秀の割合を 10%以内とすることを目安に定めているが，PBL 型授業でそのような目安を定めることができるのか？

（綾野先生）三重大学では PBL 型授業でも 10 段階評価をしている。成績の分布については，現時点では，各教員の裁量に任せている。以前の認証評価の際に 8 以上の優が多いのでは，という指摘があったそうだが，絶対評価をしていると回

答したと聞いている。三重大学では，富山大学のように決まった割合になるような成績の修正等は行なっていない。

― 従来の初修外国語（第二外国語）の授業を「異文化理解」としたことで，どのように変化し，どのような反響があったか？従来のやり方を変える上で，反発等はなかったのか？

（井口先生）報告でも述べたように，全学的には，むしろ従来の「未習外国語」を「異文化理解」とすることにより，共通で４単位必修とする了承を得た。異文化理解の各言語の状況は把握し切れていないが，私が担当・実施を行ってきたドイツ語の状況について回答する。ドイツ語では，まず共通テキストの使用に切り替えた。テキストを共通にすることで，Moodle 等も共通で作成できるというメリットがあった。また，文化的な要素も統一的に導入することができるようになった。専任教員及び特任教員が集まって全員で作成にあたり，実際に使用する際には，非常勤講師の先生方にも比較的スムーズに受け入れて頂けた。

― 富山大学では，卒業時アンケートで「国際的な視点で考えること・国際的な感覚」等の項目が十分に達成されていないという現状があり，三重大学の「異文化理解」の取り組みに関心を持っている。異文化理解の授業を実施することで，学生からはどのような反響があったか？

（井口先生）三重大学に関しても，卒業生についての企業のアンケートで外国語能力についての項目が唯一悪く，それもあって「グローバル化に対応できる人材の育成」という理念を掲げるに至った。それに基づき，英語の前期集中カリキュラム，さらに，英語特別プログラムという英語能力が高い学生をさらに伸ばそうという試み等を行った。その上で，異文化理解を取り入れることで，より広い視野に立てるようにしたいという思いがあった。効果を評価するアンケート等はまだ実施できていないが，スライドでも示したようにドイツ語では約９割の学生がドイツ語圏の文化に興味を持つようになったとしている。英語に関しては TOEIC の成績が格段に上がっており，効果として数値で示されていると思う。

三重大学の先生方への追加質問とその回答

＜教員・学生側の負担等について＞

質問：PBL 型授業はいかに学生を能動的にさせるかが重要ですが，学生の中にはグループ学修に溶け込めない，部活･バイト等で自主学習の時間を確保できない，性格的に能動的になれない等，様々な学生がいると思います。学生全体を能動的にする良い方法はありますか。

回答：グループワークへの参加に関する問題に関して，必修の「スタートアップ PBL セミナー」と「教養セミナー」については，配慮願いや学生の履修状況に基づき，それぞれの運営組織（スタートアップ PBL セミナー部会，教養セミナー部会）内でグループワークへの参加免除も含めた個別対応について検討しています。また，各教員の裁量による個別対応も有りますが，原則として部会長に相談した上で実施しています。さらに，学生なんでも相談室（心理面）や障がい学生支援センター（障がい面）の担当者と授業担当者が連携しつつ対応しているケースもあります。

いかにして学生を能動的にするのかという問いに対する適切な回答は持ち合わせておりませんが，前期必修の「スタートアップ PBL セミナー」では，グループワークを実施するにあたって，グループワークの基本（グループで活動することの重要性，グループワークを成功させるためのポイントやスキル）や効果的なコミュニケーション活動の方法について教えています。さらに，両科目において，学生のグループワークへの取り組み状況についてピア評価によって把握し，成績評価に反映することができる仕組みを取り入れています。

選択必修の科目であるスタートアップ PBL セミナーについては学生が自ら選んで受講するので，受講生はプロジェクトに積極的に取り組んでいるようです。

＜学生の反応，授業後の感想，評価について＞

質問：授業アンケート等において，この科目の履修後に，自立的・能動的学修力が身についたという評価結果はありますか。スタートアップ PBL セミナー，教養セミナーそれぞれについて，お聞かせください。

回答：毎学期末に実施している授業評価の中で，4 つの力(自立的・能動的学修力を含むジェネリック・スキル)の達成度を自己評価させています。個人の評価結果は各授業担当教員と学生自身のみが閲覧することができるようになっています。全体的傾向としては，たとえば令和 2 年度の 1 年次の春と秋の調査では，「感じる力」の「主体性」で「与えられた課題の中でも意義や面白さを見つけることができる」は若干の低下がありましたが，「常に長期的目標・短期的目標を設定し，意識しながら大学生活を送っている」「うまく進まなかったり，失敗したり

した場合でも，目標達成のために辛抱強くやり続けることができる」「与えられたもの以外にも自分で調べたり学習を進めている」「誘惑に負けずに，学習すべき時間をきちんと自己決定して確保することができる」は上昇しています。これらが 2 つの授業の直接の成果かどうかは立証できませんが，大きな影響を与えているとは言えると思います。詳しいアンケート結果は次のところをご覧ください（https://www.hedp.mie-u.ac.jp/item/r2_tasseido.pdf）。なお,「スタートアップ PBL セミナー」では独自に 4 つの力の取得の達成度について学生に自己評価させ，教員が確認しています。

＜アクティブ・ラーニング必修科目と選択科目について＞

質問：アクティブ・ラーニング領域科目，英語，異文化理解，スポーツ健康科学は必修科目とされていますが，必修が増えると選択科目が少なくなります。これについてはどのようにお考えでしょうか。

回答：現在の教養教育カリキュラム直前の旧カリキュラムでは，大綱化以降の流れで，特に理系学部の教養の単位が大きく削減され，学科によっては，教養の講義科目の必修単位が 4 単位といった状況でした。そこで，新カリキュラムでは，理系学部の基礎科目を除いた教養教育の単位数の最低ライン 26 単位程度を基準として，全学の共通カリキュラムの単位数を 26 単位に設定しました。教養の講義科目（教養統合科目）を 10 単位必修にした上で，教養セミナー2 単位を純増，異文化理解についても 2 単位必修だった学科を説得して,4 単位必修にしました。教養統合科目 10 単位というのは決して多くはありませんが，全学として受け入れられるギリギリの単位数であったように思います。

ここでたとえば，教養セミナーや異文化理解をなくして，その分を自由選択にまわすという考え方もあると思います。しかし，それでも 16 単位です。これを従来のように，人文，社会，自然分野でまんべんなくとらせようとすると，一分野につき 5 単位あまり，つまり各分野半期 1～2 科目になります。学生の自由にまかせるとすると，脈絡のない「つまみ食い」的履修になることは目に見えています。なんらかの理念に沿って系統立てて履修させること等この単位数では不可能です。私たちはそれよりも理念実現のためにある程度の方向付けをし，自由に選択できる教養統合科目 10 単位はそれに基づく実践の場ととらえています。

＜将来的な方向性について＞

質問：これまでのアクティブ・ラーニング型の授業を今後さらに発展させていくとすれば，どのような方向性が考えられますか。

回答：すでにご報告したように，教養教育院は本年度末で廃止となり，現行カリキュラムも来年度末で終了しますので，教養教育院としての展望を述べることは

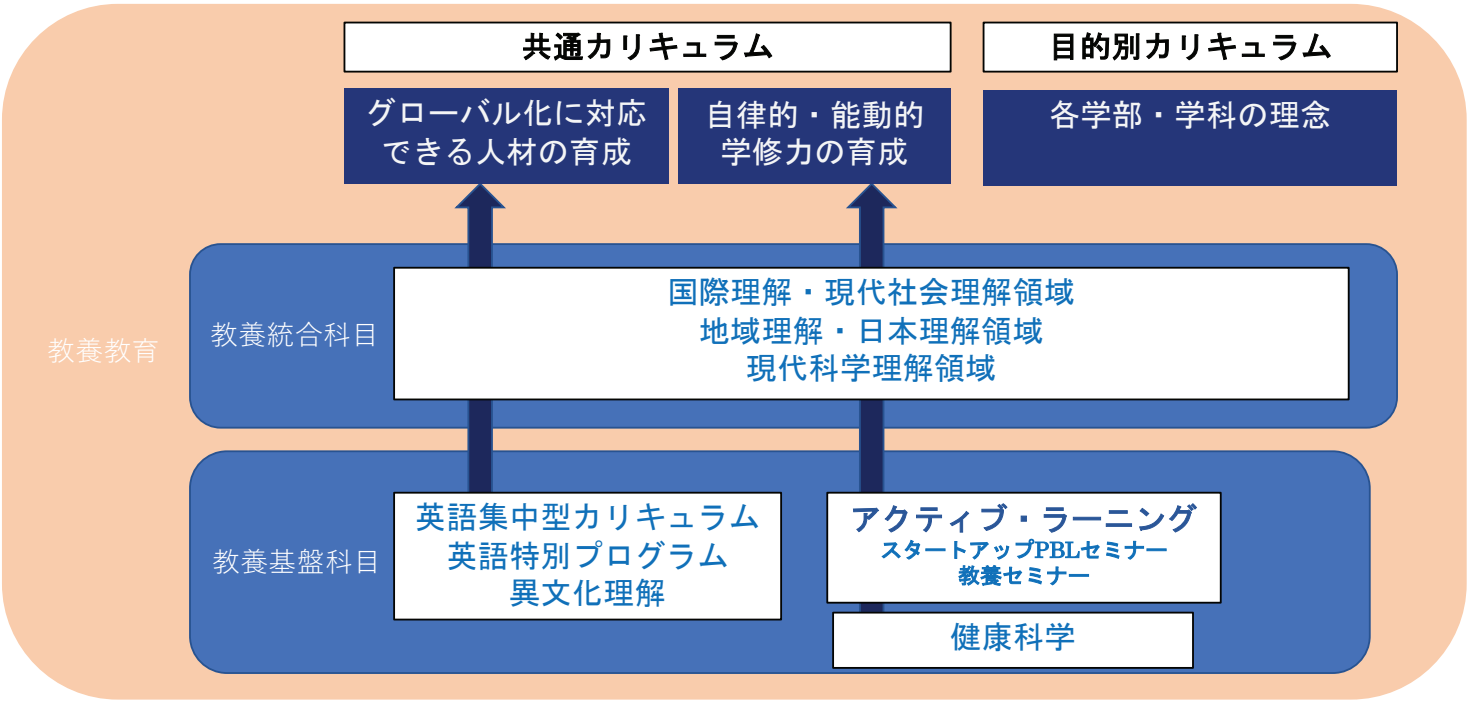
できませんが，教養教育院の経験を基に意見を述べさせていただくとすれば，各種 FD 活動も含めた授業運営体制を構築することではないでしょうか。授業計画の段階でのアドバイス・相談体制，授業担当者による定期的な打ち合わせ，相互の授業参観と授業の最終成果を相互に確認することによる授業改善，さらに取り組みを全学に広げるための FD 研修会の実施等，個々の教員の取り組みで終わらせるのではなく，組織的に授業運営を行うことによりさらに発展するように思います。

最初のご質問も決定的な解決法はないと思いますので，教員間で議論して検討する場を公式，非公式に設けて，ひとつひとつのケースに対応していくしかないように思います。

教養教育の理念と
カリキュラム

三重大学教養教育院 副院長
綾野　誠紀

教養教育の理念とカリキュラム（2015年度開始）



教養教育　共通カリキュラム

PBLに基づく探究活動

	領域	科目	必修	選択
教養基盤科目	アクティブ・ラーニング	スタートアップ PBLセミナー（前期）	2	
		教養セミナー（後期）	2	
	外国語教育	英語	6	
	異文化理解	異文化理解基礎	2	
		異文化理解演習	2	
	健康科学	スポーツ健康科学	2	
教養統合科目	地域理解・日本理解		2	2
	国際理解・現代社会理解		4	
	現代科学理解		2	
合計			26	

各科目にPBLセミナーを開講可

前期
必修

スタートアップPBLセミナー

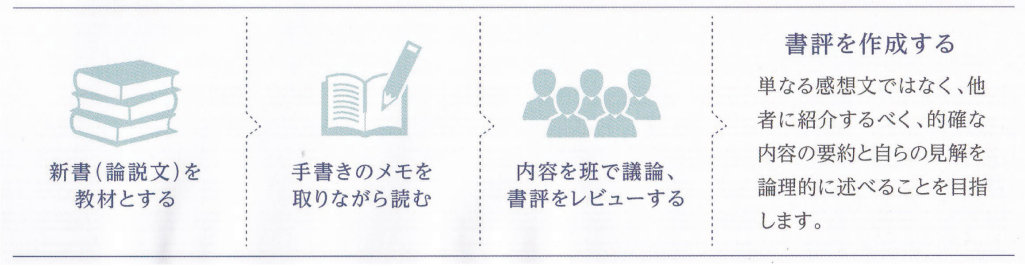
授業概要：

PBLに基づいたプロジェクト活動に取り組む中で、三重大学のディプロマ・ポリシー「4つの力」の内容について知り、大学での学習方法やスキルなどを体験的に学習し、大学生活へのスムーズな移行をはかる。

後期
必修

教養セミナー

授業概要：
教員のファシリテーションの下、グループワークを通して、新書（基本的に論説文）を一冊以上読んで、書評を書くことにより、自律的・能動的学習力の基盤となる「読む」「書く」能力を育成することを目的とする。



選択
必修

異文化理解領域

- 多様な文化を理解するグローバル人材育成のため、異文化理解の科目を履修する。
- [目的]言語を手段として、その言語が使用される文化圏の文化、歴史、生活等を理解する。

ドイツ語　フランス語　中国語　朝鮮語、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語

必修	異文化理解基礎	各文化圏の言語を習得する（２単位）
	異文化理解演習	その言語が用いられる地域の文化、社会、歴史等を理解する（２単位）

教養教育で「異文化理解」

教養教育基盤科目の一つである「異文化理解」領域科目には、**ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語・ロシア語・スペイン語・ポルトガル語**のいずれかの言語を手段として、その言語が使用される文化圏の文化・歴史・生活等を理解することを目的とする授業科目があります。

1年次に、上記の中から言語を1つ選び、以下の2種類の授業科目を履修します。

「異文化理解I基礎」（前期1単位・後期1単位）

「異文化理解I演習」（前期1単位・後期1単位）

このリーフレットは、異文化理解領域における各言語の授業科目について簡単に紹介し、新入生の皆さんが選択する際の助けとなることを目指して作成されたものです。ぜひ目を通して活用してください。

【注 意】
①ドイツ語・フランス語・中国語以外の異文化理解領域科目は、学部・学科によっては、時間割上の事由により、履修できない場合が生じます。
②ドイツ語・フランス語・中国語の異文化理解領域科目では、2年次以降の同言語科目も開講されています。時間割履修条件を参照してください。

異文化理解領域科目① ドイツ語

ドイツ語はドイツ・オーストリア・スイスだけでなく、リヒテンシュタインとルクセンブルクでも公用語とされています。また、イタリアの南チロル地方、フランスのアルザス・ロレーヌ地方、ベルギー東部、さらに南北アメリカ大陸にも母語話者がいて、合わせて2億人近い人々が使っています。

明治の日本が、ドイツの法律制度や軍事・医学・農学・林学などをモデルにして近代化したことは知っていますね？現代でも日本とドイツは、少子高齢化による年金制度の悩ミ ぎや、廃発やリサイクルに代表される環境政策、外国からの労働者の流入など、同じ問題に直面していて、お互いに学び合っています。

ドイツはサッカーとビールと童話だけの国ではありません。歴史的にも現代においても日本とつながりの深いドイツの文化を学んで、日本のことをもっとよく考えてみませんか。

異文化理解領域科目④ 朝鮮語

日本では朝鮮半島を主として話されている言語を総体的に朝鮮語と称してきました。そして現代の韓国で使われている言語を韓国語と呼んでいます。朝鮮半島は現在南北に分断され、韓国（大韓民国）と北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）という2つの国が存在します。南北の言語ではもとからあった方言差に加え、約70年に及ぶ分断の中で生じた差も多々あるものの、1つの言語であることには違いありません。

授業では韓国の文化及び韓国語を対象とします。日本はとても近い国で、言語の構造も生活形態も似ていますが、そこはやはり外国。「あれっ」「おやっ」という点もたくさんあります。韓国を知ることはやまで気づかなかった日本を発見することでもあります。「異文化理解I基礎」では韓国語の初歩を、「異文化理解I演習」ではエッセーを読むことを通して韓国的なものの考え方・風習・現代の韓国人気質や社会的風潮などについて学びます。

異文化理解領域科目⑤ ロシア語

ある交渉の際、ロシア側は相手をじっと見つめ、日本側は話に聞きながら聞いていました。両者とも真剣に交渉に臨んでいますが、どういうわけかうまくいきません。日本人には、聞きもせず目を見つめられるのが怖く、他方ロシア人には、話の最中に何度も聞く相手が真剣に聞いているようには感じられません。話を聞く態度ひとつとっても、「異文化」は存在するのです。

Россия、ロシア語では自分の国をこう書きます。皆さんの知っている文字もありますが、読み方の違う文字、全く知らない文字もあります。アルファベットだけでなく文法構造の点でもロシア語は比較的「難しい」言語の一つで、意味がいくつかの「山」もあるかと思います。ですが、それを越えてゆけば1年で辞書を片手に、読み、理解し、話せるようになります。ロシアの生活習慣や文化、国民性にも触れてもらいながら、日本や欧米とはまた違う、異文化の理解に繋げてもらえればと思います。

異文化理解領域科目② フランス語

フランス語は世界各地で話され、ベルギー人の38%、スイス人の27%、カナダ人の26%はフランス語が母語です。食象国南部にはフランス語を話すGajnという人々がいます。アフリカでは数が国でフランス語が唯一の公用語、公用語ではないモロッコ、アルジェリアなどでも広く用いられています。南太平洋のタヒチとニューカレドニアはフランスの植土なのでフランス語です。国際オリンピック委員会の公用語はフランス語と英語でフランス語優先。FIFAは国際サッカー連盟のフランス語名の略です。フランスはファッション、グルメ、芸術、豊かな自然と歴史、多様な地域文化などが魅力で、外国人観光客数は毎年世界一。日本の2.8倍（'19）です。仕事の世界でも労働生産性は日本より30%高く（'19）、長時間労働者（週60時間以上）は千分の割合ですが（'18）、フランスとフランス語圏の文化にフランス語を通して近づいてみましょう。

異文化理解領域科目③ 中国語

中国語は、中華人民共和国・台湾・香港・東南アジアの華僑・華人社会をあわせれば約15億人以上の、世界最大の使用人口を誇る言語であり、国連の公用語でもあります。広大な領域に根付いた様々な固性豊かな中国文化は、古来より日本にも大きな影響を及ぼしてきました。最近では経済発展により、政治、経済の面で国際社会や日本にとって、無視できない存在となっています。

日本に大きな影響を与えた中国の文学・歴史・思想・医学・文字・言語もして現代中国の社会や政治経済は、将来大学で学んだ知識を駆使して各方面で活躍してゆく皆さんにとって、押さえておかなければならない知識です。

「異文化理解I基礎」「異文化理解I演習」における中国語の授業では、中国語の初歩的な知識を学ぶと同時に、中国の文化や社会を理解します。また継続して更に高度な語学力を育てるための授業なども用意されています。

異文化理解領域科目⑥ スペイン語

スペイン語は、世界で約4億2千万人の人々に日常的に話されており、スペイン、北米1ヶ国、中南米17ヶ国、アフリカ1ヶ国の計20ヶ国（米国自由連合州のプエルトリコを入れると21ヶ国）の公用語となっています。また国連の公用語の1つでもあります。一方アメリカ合衆国では、中南米諸国出身のヒスパニック系民が激増し、その勢力は日に日に増してきて無視できない存在になっています。

スペインと聞くと、「闘牛」「フラメンコ」「赤いバラ」という40年以上前の観光用キャッチフレーズを思い浮かべられる方も多いと思いますが、もちろんそれだけではありません。1492年コロンブスのアメリカ大陸到達から、16世紀には「日の沈まない大帝国」と呼ばれ、20世紀には内戦を経験し、現在はEU諸国の一員となっているスペインの歴史と文化を、言語を通して学んでいきましょう。

異文化理解領域科目⑦ ポルトガル語

ポルトガル語はポルトガル・ブラジル・アフリカやアジアの一部など、世界8ヶ国で公用語となっていますが、大学ではブラジルで話されているポルトガル語を学びます。ポルトガル語はあまりメジャーな言語とは言えませんが、東海地方には在日ブラジル人が多いので、よく目にしたり耳にしたりできる非常に身近な言語です。ブラジルといえば、サッカー・リオのカーニバル・コーヒー・アマゾンなどが有名ですが、実は世界最大の日系人社会があり、日本とは距離が離れていますがとても密接な関係を持つ国です。

2014年のサッカーワールドカップや2016年に行われたリオデジャネイロでのオリンピック開催など、ブラジルは今とても注目を浴びています。将来東海地方で就職する時には活用できる言語なので、ぜひこの機会にブラジル・ポルトガル語を勉強してみませんか。

選択必修

教養統合科目（領域と科目群）

• 地域理解・日本理解領域

哲学、倫理学、日本史、日本文学、日本語学、法学、政治学、経済学、地理学、日本学、三重学、医学・看護学、日本理解特殊講義

• 国際理解・現代社会理解領域

哲学、倫理学、宗教学、東洋史、西洋史、比較文化論、心理学、法学、社会学、文化人類学、政治学、経済学、地理学、言語学、地域学、医学・看護学、環境学、芸術学、国際理解特殊講義、国際理解実践、現代社会理解特殊講義、現代社会理解実践

• 現代科学理解領域

心理学、数理科学、物理学、化学、生物学、自然科学概論、医学・看護学、環境学、環境科学、生物資源学、防災論、現代科学理解特殊講義

＊申請によりPBLセミナーとして開講することができる。

2022.2.富山大学FD研修会
三重大学でのPBLの導入と実際

PBLの開発と導入

教育学部特任教授
山　田　康　彦

目　次

1. PBL教育の導入・展開の過程

2. PBL体制の構築

3. PBL教育体制の現段階

4. 三重大学のPBLの到達点と課題

1. PBL教育の導入・展開の過程

2004年7月　概算要求提出（特別教育研究経費）
＜「e-learningを駆使したPBLチュートリアル教育の全学的展開」＞
2005年度＝システムの構築、教育プログラムの開発と試行
2006年度＝導入開始　100科目以上開設
2007年度＝全学で本格実施　218科目
2009年度：429科目（ウェブシラバス集計）
2011年度：556科目
2017年度：534（学士課程372科目　大学院162科目）
全学で500科目以上実施され、定着している。1教員1科目開講の割合

参考　世界におけるPBLの歴史的経過

- 知識・技能伝達型の受動的学習に対して、20世紀初頭からの学習者の能動的な実際的な学習を主張する新教育の流れに位置する。
- 1960年代の終わりからカナダのマックマスター大学の医学部で問題発見解決型学習（Problem-based learning）が開始され、医学教育界で広まっていった。
- 1970年代に、デンマークのオルボー大学などの工学系のプロジェクト設定型学習（Project-based learning）が開始される。
- 1990年代から、医学や工学だけでなく、他の専門分野でも取り入れられるようになってきている。
- 2000年代になると両形態の共通性に着目して、PBLと一括して展開される動向も生まれてきた。

日本

- 日本では1990年代に医学教育や工学教育で導入され始め、2000年代に多分野で実施する大学が増加
- 問題基盤型だけでなく、プロジェクト型など多様なPBL教育が展開
- 教育改善の目玉としてPBL教育への注目の拡大
  「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要」（2012年8月中教審答申「大学教育の質的転換」）
- 小中高への広がり（2017年学習指導要領改訂）

＜参考＞PBL教育の研究状況

研究論文数［CiNii Articles］は、2000年に10件だったが、2010年代に年間100本を超える。

対象となるPBL教育実践が多様で幅広い分野に広がっている。

医学や看護学分野のみならず、栄養士養成、経営学、教員養成、大学生教育一般、異文化理解・国際交流など、教養教育から専門教育まで多様な領域や分野で展開。

特に多いのが、情報教育や工学教育における技術者教育の面、地域連携教育など地域をフィールドに学習・研究する取組。

ただしPBL教育の理論の面で発展、深化させる研究が少ない。

2. PBL体制の構築

A. 大学全体の目標の一環として位置づける

B. FD(全学、研究科単位)の継続的実施
（理念・目的・方法の共有）
・外国や日本の他大学の事例　・授業開発のワークショップ
・学内の実践の発表・交流

C. 推進組織（委員会・センター）を設置し、中核メンバーを形成
高等教育創造開発センター（現高等教育開発・IRセンター）設置
合宿研修開催、外国先進大学のFDに派遣
学部レベル＝教育学部「実施委員会」 教養教育「担当者会議」

D. システムの整備　全学無線ランシステムとMoodle

E. 内容面・財政面で支援
（PBL支援プログラムの公募・採択2007～2013）

F. 執行部のリード・サポートとボトムアップ

1）大学全体の目標の一環として位置づける

第１中期目標期間＜年度計画＞
学習・研究の基本となる「感じる力」「考える力」「生きる力」およびコミュニケーション力を育成するための教育を推進する体制を整えるとともに、それらを評価する具体的な方法を検討する。

第２中期目標期間［教育指導方法の中期計画］
「４つの力」を養成するために、プレゼンテーション型授業、グループ学習、PBL、三重大学Moodle等のeラーニング、そして学習時間の確保等、授業形態や指導方法の開発・改善を進める。さらに、FDを通して教員の理解を深め、教育方法の改善を促す。

第３中期目標期間［中期計画］（教育指導方法）
学生の自律的・能動的な学修を促進するために、教養教育及び専門教育を通じて、PBLセミナーの開設数を平成27年度比2倍以上にするなど、アクティブ・ラーニング型の授業を拡充する。また、専門教育においても英語eラーニングシステム 等の主体的修学をサポートするプログラムの活用を促進する。

PBLが先にあったのではない
大学の目標が先にあった

「感じる力」「考える力」「生きる力」がみなぎり、地域に根ざし国際的にも活躍できる人材を育成する

（当初の4つの力）
「コミュニケーション力」を基盤に「感じる力」（問題発見力）・「考える力」（論理的・批判的思考力）・「生きる力」（問題解決・自己形成力）を育てる
（現在の4つの力）
「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」と総合した「生きる力」

↓

４つの力を備えた人材を育てるためには、これまでと同じ教育をやっていては実現できない

→教育改革の必要→PBL教育の全学展開（全国で初めて）
（教養と専門の両方、全学問分野）

2）PBL教育推進のFDの継続的実施

2005年3月　第1回国際シンポジウム開催　PBL教育の概念
　　南イリノイ大学　アン・ケルソン氏
　　7月　各学部中核メンバーによる宿泊型FD開催
2006年3月　e-learningシステム（Moodle）の構築とFDの開催
　　5月　第2回国際シンポジウムの開催＜PBLの方法論＞
　　デラウェア大学　デボラ・アレン氏
　　8月　HEDC教員をデラウェア大学PBL・WSに派遣
　　9月　事例シナリオ作成セミナーの開催
2010年2月　全学FD　協同教育のすすめ
　　9月　全学FD　多様なPBLを導入した授業デザイン
　　11月　PBL支援事業実施
　　11月　デンマーク・オルボー大学WSへ2名の教員の派遣
2013年2月　公開FD:アクティブ・ラーニングの課題と探求
　　―PBL教育の現段階と今後の展望について考える―

3）PBLの理論化・類型化

■PBL(問題発見解決型学習)とは

Problem-based LearningまたはProject-based Learning

学生を受動的にしてしまう従来型講義を改善して、
学生自らが能動的に学習する仕組みをもつ教育法。

身近に感じられる具体的な事象から問題(課題)を発見し、
その問題を解決するために学生が自ら学習(self-directed learning)し、問題を解決する。

＜PBL教育の6要件＞提示　2005年PBLガイドライン 2007年マニュアル

1. 学生は自己学習と少人数のグループ学習を行う
2. 問題との出会い、解決すべき課題の発見、学習による知識の獲得、討論を通じた思考の深化、問題解決という学習過程を経た学習を行う
3. 事例シナリオなどを通じて、現実的、具体的で身近に感じられる問題を取り上げる
4. 学習は、学生による自己決定的で能動的な学習により進行する
5. 教員はファシリテータ（学習支援者）の役割を果たす
6. 学生による自己省察を促し、能動的な学習の過程と結果を把握する評価方法を使用する

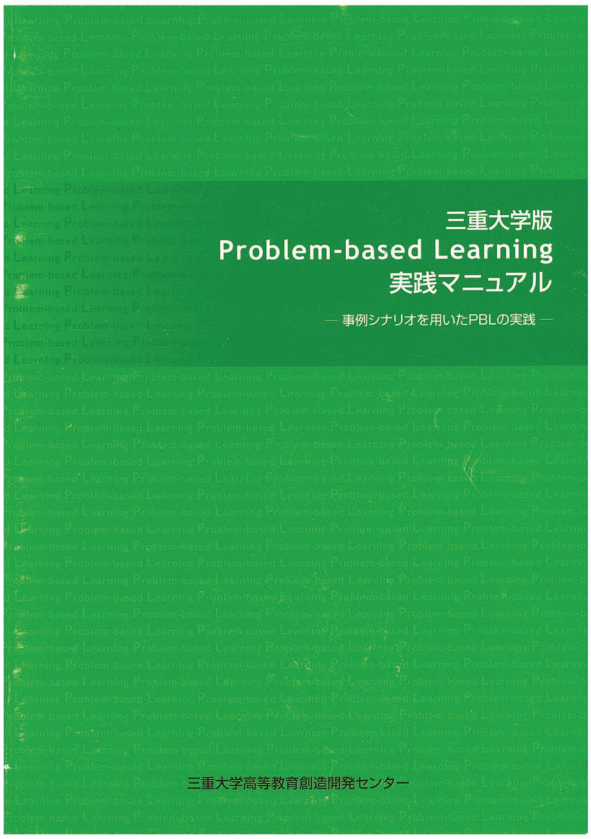
＊厳密なPBL教育概念の普及
＊事例シナリオを使用する新しい教育方法の提示

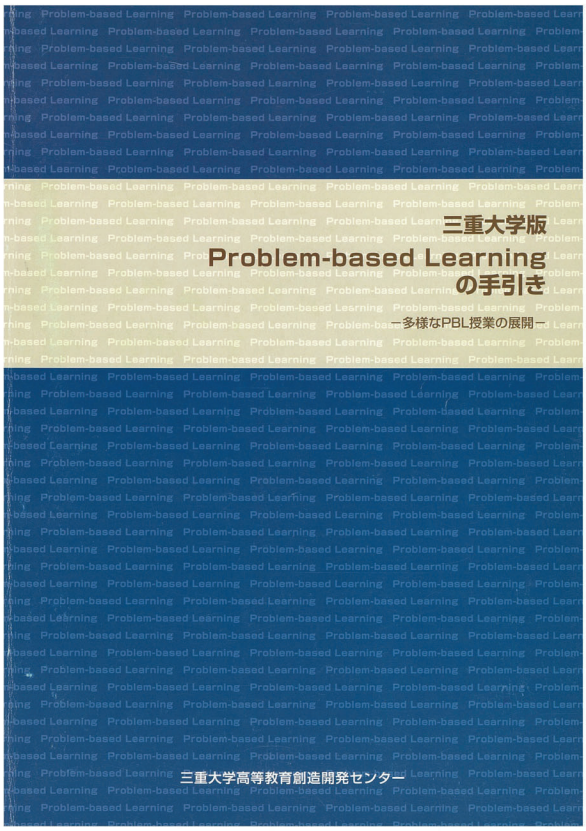
＜PBL教育の基礎要件の見直し＞2011年

（『三重大学版Problem-based Learningの手引き－多様なPBLの展開』）

1. 問題との出会い、解決すべき課題の発見、学習による知識の獲得、討論を通じた思考の深化、問題解決という学習過程を経る学習を行う（問題基盤性）
2. 学習は、学生による自己決定的で能動的な学習により進行する（学習自己決定性）
3. 学生による自己省察を促し、能動的な学習の過程と結果を把握する評価方法を使用する（形成的評価）

＊ＰＢＬ教育にとって必須となる要件に絞る
＊ＰＢＬ教育の広く多彩な展開の契機を生み出す





■PBLの主な授業タイプ

1. 問題提示型PBL（事例シナリオ活用を含む）

学習の契機になる問題との出会いを教員が提示。学習課題の設定や学習の遂行は学生の自己決定による。多人数型授業、事例シナリオ活用型授業などの形態がある。

2. 問題自己設定型PBL

学習の契機になる問題も学習課題もすべて学生自身が設定。共通教育授業、専門指向型授業のどちらでも可能な形態。

3. プロジェクト型PBL

学内外の要請や課題設定に基づいて、ある企画の遂行・達成をめざす問題解決的な学習。問題解決及び課題達成の志向性が強い。現場問題解決型授業、課題遂行型授業などの形態。

4. 実地体験型PBL

様々な場での実地体験を通して問題との出会い、問題・課題の発見、問題解決を進める学習。問題解決の成果をもとめるよりも、実地での体験を重視。

3. PBL教育体制の現段階

1）PBLの停滞

1. 大学全体の目標の一環として位置づける
   →変化はない
2. FD(全学、部局単位)の継続的実施
   →アクティブ・ラーニングのFDの実施が少ない
3. 推進組織（委員会・センター）の設置
   →全学・部局でアクティブ・ラーニングを固有の目的とした組織がなくなる
4. 内容面・財政面で支援
   →PBL支援プログラムの固定化と終了（2013年度）
5. 執行部のリード・サポートとボトムアップ→一部

2）PBL 教育推進プロジェクトの設置（2017年）

1. 三重大学PBL教育実態調査の実施

実施期間：2018年1月5日～19日

回答数：

全教員を対象とした調査（下記対象以外）　194回答

PBLを実施している教員を対象とした調査　159回答

計　353回答　／　全教員数（助教除く）546名

授業担当教員過半数からの回答と判断される

全教員を対象とした調査での特徴的な結果：

●PBLの実施状況

回答者の約半数がPBLを授業に取り入れている。

経験年数15～25年の階層で実施率が高い。

着任5年以下の階層で実施率が低い。→周知不足

●PBLへの関心

PBLを実施していない教員の約8割がPBLに関心がある。

その半数近くが「やってみたい」と回答。

着任5年未満では6割以上が「やってみたい」と回答。→関心の高さ

●PBLの成果

学生の主体的な学び、大学で必要とされる資質能力、自ら探究を進めて行く姿勢や態度の形成

教員自身は，授業における工夫の促進、学生自身の成長を実感。

●現在PBLを行っていない理由

①「科目の性質上PBLが適していない」（38%）
②「授業形態上困難」（13%）
③「PBLに意義や必要性を感じない」（12%）

①は基礎教育と専門教育に関わらず，知識・技能の習得を目的とする科目においてPBL教育は適していないという判断による。
③はPBLに対して消極的あるいは否定的に評価している結果による。（基礎知識の習得が疎かに。グループ活動は意義がない。学生の自主性は成果が上がらない）
②は授業形態やカリキュラム上自由裁量ができないという制度上の困難
その他、時間的余裕がない、PBLの実施方法がわからない

2. 近年の PBL 教育推進事業

PBLセミナーの推進（2018年～）

- ・PBLセミナーの定義、ガイドラインの周知
- ・奨励金の支給
- ・事前・事後の「授業検討交流会」の開催
- ・授業参観の推進
- ・2018＝17科目、2019＝46、2020＝40

PBL公開フォーラムの実施（2019年3月）

PBL事例集の公開

（『多様な PBL の実践事例と 7step からの検討
—PBL の質的充実に向けて— 』2021年3月）

4. 三重大学のPBLの到達点と課題

（1）一定の定着

全学で500科目以上実施され、定着している。

１教員１科目開講の割合

（2）全国の中でPBL先進大学として評価

FDへの依頼　　大学教育関係文献に紹介

（3）教育マネジメント・ガバナンスでの見直し

- ・アクティブ・ラーニング（PBL）の位置づけを明確に
- ・全学と学部・教員間、教員相互間の相互理解

（4）授業の開発・改善

教員同士がサポートし合う関係の創出

（5）PBL教育の高度化の実現

スタートアップPBLセミナー

スタートアップPBLセミナー部会長
長濱 文与

報告の流れ

教養基盤科目　アクティブラーニング領域

スタートアップPBLセミナー　（2単位）

1. 概要
2. 基本方針、主な学習内容
3. 学習を促進するための工夫
4. グループ活動とピア評価
5. 課題

概要

■ 授業運営

- □ スタートアップPBLセミナー部会を中心に
- □ 日本語34クラス：担当8名　英語3クラス：担当1名（2021年度）
- □ 基本方針に則り、授業を運営

■ 到達目標

- □ 教育目標「4つの力」について知る
- □ 大学生としての学びの基盤を作る
  - □ 学びに対する認識づくり、学習スキルの獲得
- □ 三重大学での学びの基盤を作る
  - □ PBL教育など

■ 授業の構成

- □ プロジェクト活動の遂行を通して、到達目標の達成を目指す

- □ プロジェクト活動の大テーマ：

  社会に存在する具体的な課題について、情報収集や分析を行いながら課題を取り巻く現状を多面的に理解し、未解決の問題の解決に向けた検討可能な問いを設定する。

2021年度設定した課題：
新型コロナウイルス感染症の発生・拡大に伴い、
新たに/再度注目されるようになった課題

- □ 授業計画

授業回	授業テーマ	授業回	授業テーマ
第1回	オリエンテーション	第9回	批判的検討①
第2回	プロジェクトについて	第10回	批判的検討②
第3回	情報の収集/整理の方法	第11回	発表内容の構成
第4回	課題の現状理解と分析①	第12回	最終発表の準備
第5回	課題の現状理解と分析②	第13回	最終発表とピア評価
第6回	問いの設定①	第14回	プロジェクトの再構成
第7回	問いの設定②	第15回	授業全体のまとめ
第8回	中間発表とピア評価		

基本方針、主な学習内容

基本方針：学習した内容を、授業内や課題で実践する。
各回の成果を積み上げ、最終成果物を完成させる。
毎回、グループでの意見共有/議論の機会を設ける。

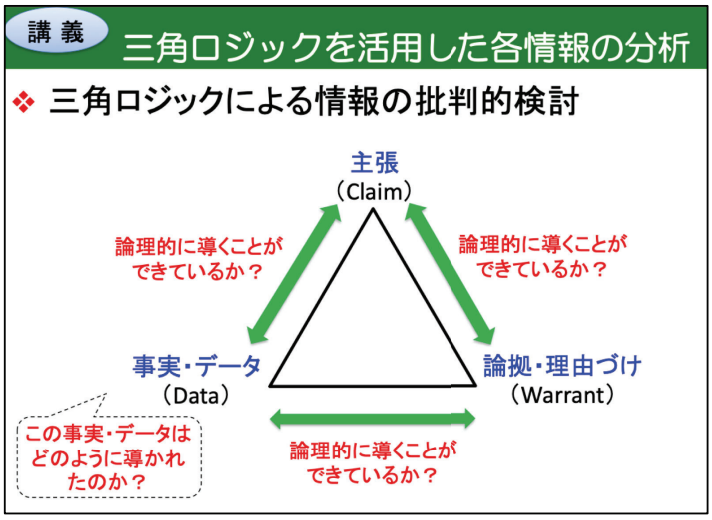
授業回	授業テーマ	学習内容
第1回	オリエンテーション	・大学での学びとは ・到達目標、授業の全体像、評価方法の理解
第2回	プロジェクトについて	・プロジェクト活動全体の理解 ・アイデア発想の方法
第3回	情報の収集/整理の方法	・情報収集の目的と方法 ・収集した情報の整理方法
第4回	課題の現状理解と分析①	・問い設定までのステップの理解 ・課題の現状理解の方法 ・課題の現状理解に向けた情報収集
第5回	課題の現状理解と分析②	・三角ロジックを活用した各情報の分析 ・収集した情報・情報の分析結果から、課題の現状を改めて理解
第6回	問いの設定①	・問いの設定に向けて必要なこと（問題の特定と明確化、三角ロジックを活用した論理構成） ・問いの設定に際して考慮すべき点

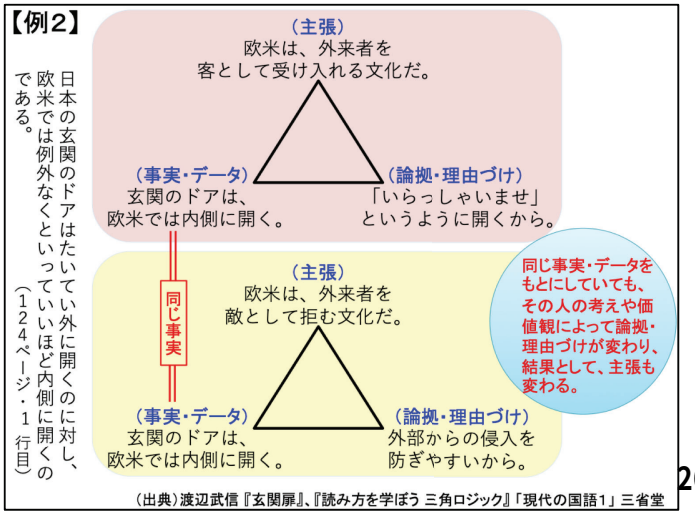
授業回	授業テーマ	学習内容
第7回	問いの設定②	・問いの設定の方法
第8回	中間発表とピア評価	・より良い発表にするために　・評価の目的と方法 ・相手の主張（話）を「聴く」姿勢・態度 ・効果的なコメント作成の方法
第9回	批判的検討①	・批判的思考とは　・具体的な実践ポイント ・収集した情報の批判的検討
第10回	批判的検討②	・問題を捉える思考法を活用した、問いの批判的検討
第11回	発表内容の構成	・レポート、論文とは何か ・レポート、論文の構成 ・最終成果物と序論の関係（序論のS-C-Qモデル）
第12回	最終発表の準備	・レポート、論文作成の基本的事項（パラグラフの書き方、引用の方法、事実と意見の区別の方法、分かりやすい文章作成のポイント）
第13回	最終発表とピア評価	・評価の目的と方法　・効果的なコメント作成の観点 ・最終発表とピア評価の実践 ・ピア評価に基づく最終成果物の改訂
第14回	プロジェクトの再構成	
第15回	授業全体のまとめ	・ふり返りの目的と意義 ・ふり返りの観点 ・この授業での学習のふり返り

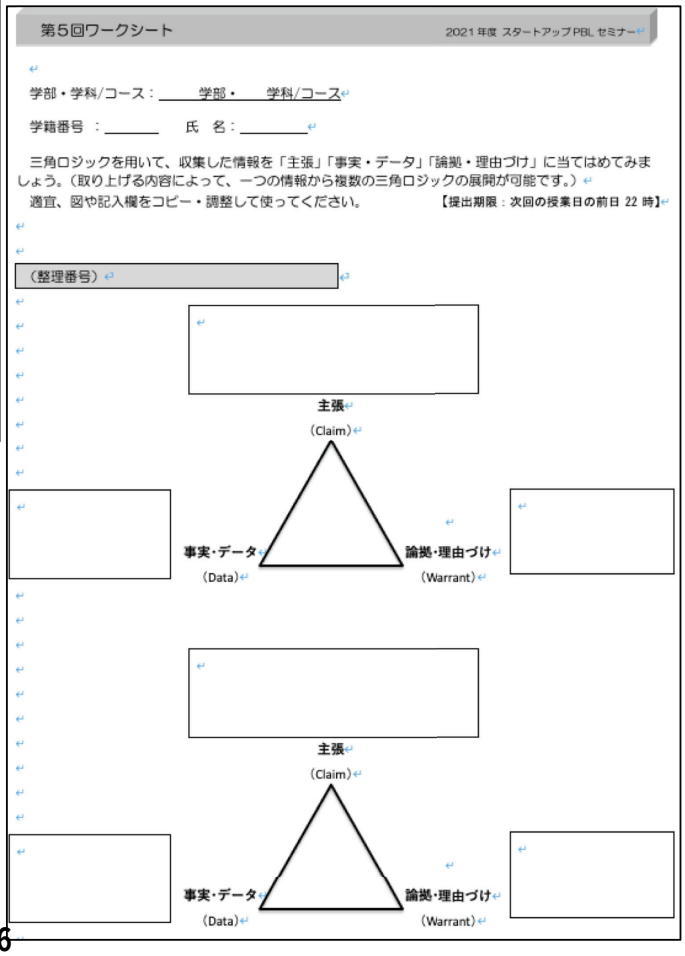
学習を促進するための工夫

- 講義/課題の説明動画、授業スライド、参考資料、　ワークシート等のコンテンツ掲載
- 学習内容の活用を容易にする仕組みの構築

プロジェクトや初年次として必要な内容を各回で学習 → ワークシートを使って、学習内容を実践 → 毎回のワークシートや課題を通して思考を積み重ね、最終成果物を完成







グループ活動とピア評価

- 毎回、グループ活動を実施
  - 同級生との関係構築の機会
  - 毎回、異なる仲間と出会う契機に
- 中間発表、最終発表におけるピア評価の実施
  - ルーブリックを用いた評価活動
  - 研究発表における質疑応答をイメージしたコメントの伝達

2021年度スタートアップPBLセミナー

最終成果物のルーブリック

観　点	観点の説明	レベル1 「　かなり努力を要する　」	レベル2 「　努力を要する　」	レベル3 「　最低限は満たしている　」	レベル4 「　十分に満たしている　」
観点1 現状理解に基づいた問題の把握と問いの設定	複数の事実やデータをもとに現状を理解した上で、抽出した問題を解決するための具体的で絞られた問いの設定ができている。	限られた事実やデータから偏った現状理解をしているため、問題が適切に抽出できていない（例えば、予め問題を決めつけている、偏った視点から問題を捉えている、等）。	複数の事実やデータをもとに現状を理解できているが、現状と問題との関係が明確に記述できていない。	複数の事実やデータをもとに現状を理解した上で、抽出した問題を解決するための問いの設定ができている。しかし、問いの対象や内容についてはさらに具体化する余地がある。	複数の事実やデータをもとに現状を理解した上で、抽出した問題を解決するための具体的で絞られた問いの設定ができている。
観点2　論証と論理展開	根拠となる事実・データと理由づけを示し、問いを探究する意義を論理的に説明できている。	根拠となる事実・データを示していなかったり、主観的な考えや感想が根拠として示されたりしていて、問いを探究する意義が説明できていない。	根拠となる事実・データは示されているが、理由づけが記述できていない。	客観性の高い事実・データを根拠として示すことができており、理由づけも記述できている。しかし、事実・データの数が少なかったり、理由づけが飛躍していたりして、問いを探究する意義について論理的に説明できていない。	客観性の高い事実・データを根拠として示すことができており、理由づけも論理的に記述できている。問いを探究する意義を論理的に説明できている。
観点3　文章表現	文体、文法、語彙、句読点、字下げ等に誤りや乱れなどがなく、主語と述語が対応した文を作ることができている。また、パラグラフごとに一つの内容を扱うことができている。	パラグラフの始まりを一字下げたり（字下げ）、文体を統一するなどの基本的なルールを守られていない。文法、語彙、句読点に誤りや乱れが多く、文章の見直しができていない。	文体、文法、語彙、句読点、字下げ等のいずれかに誤りや乱れがある。また、文章が長過ぎる箇所や主語と述語が対応していない箇所がみられる。1つのパラグラフで述べたいことを明確に記述できていない。	文体、文法、語彙、句読点、字下げ等に誤りや乱れはなく、主語と述語が対応した文章が書けている。また、1つのパラグラフで1つのトピックを扱うなど、読み手に配慮した書き方ができている。	文体、文法、語彙、句読点、字下げ等に誤りや乱れはなく、1つのパラグラフで1つのトピックを扱うという原則も守ることができている。また、読み手を意識した明快で読みやすい文で書くことができている。

課題

- オンライン/ハイブリッド授業における、アクティブラーニングの難しさ
  - 画面の向こうの「見えない学生」
  - 教室に来る学生の固定化
- グループ活動の難しさ
  - 個人プロジェクトを遂行する上で、内容について他者と共有/議論することへの価値づけ
  - 表面的でなく、思考を深めるグループ活動を実現するには

ご静聴ありがとうございました

三重大学でのPBLの導入と実際

教養セミナー

富山大学　2022年2月2日
三重大学名誉教授・元教養教育機構長
井口　靖

1. 教養セミナーの概要

教養教育　共通カリキュラム

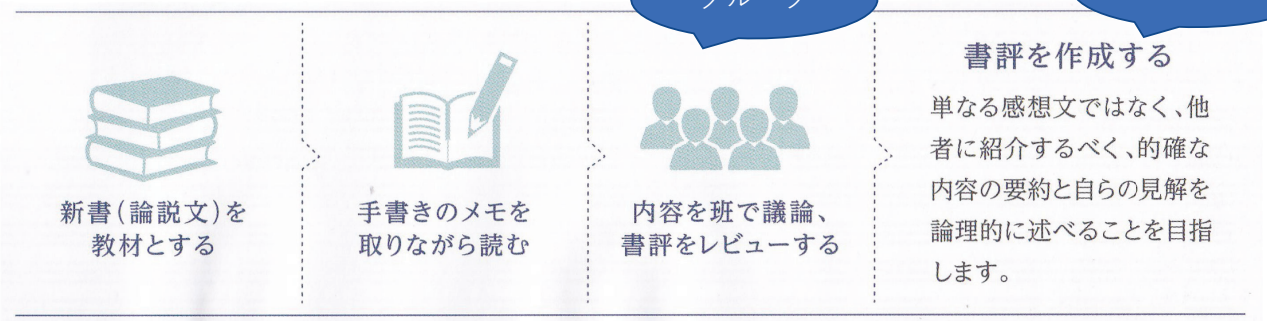
	領域	科目	必修	選択
教養基盤科目	アクティブ・ラーニング	スタートアップPBLセミナー（前期）	2	
		教養セミナー（後期）	2	
	外国語教育	英語	6	
	異文化理解	異文化理解基礎	2	
		異文化理解演習	2	
	健康科学	スポーツ健康科学	2	
	キャリア教育		(2)	
教養統合科目	地域理解・日本理解		2	2*
	国際理解・現代社会理解		4	
	現代科学理解		2	
合計			26	

*はキャリア教育の科目２単位で置き換えることができる。

後期
必修

授業内容：新書を読んで書評を書く

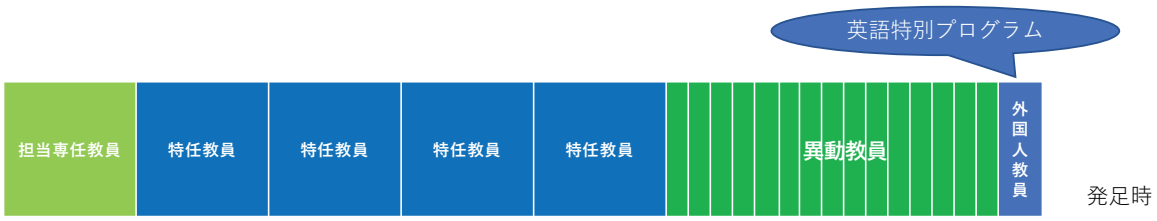
グループ　　各自



- 論説文
- グループで本を選ぶ
- 読書シートに手書きでメモ
- 互いに批評して書き直し
- 学生間評価
- 研究倫理

授業運営

- 担当



約40クラス　1クラス35名前後

1グループ　5～6名

　　2～３学部混合編成　学科も分散

- 統一シラバスでの実施
- 統一スライド、統一資料（資料は提供するが、細かな授業運営は教員にまかせる）
- 新たな異動教員もすぐに担当できるように、詳しい担当マニュアルを用意

2.
授業内容

授業計画

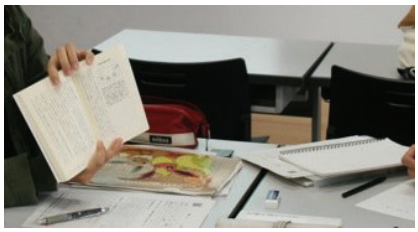
第１回：ガイダンス・班分け・自己紹介
第２回：授業の背景、引用のポイント
第３回：書評とは、新書とは
第４回：要約の仕方
第５回：批判的読解
第６回：書評を書くための新書の選定
第７回：読書計画の立案
第８回：読みあわせと書評作成１
第９回：読みあわせと書評作成２
第10回：読みあわせと書評作成３
第11回：書評原案の査読（班内）
第12回：書評初稿の査読（班内）
第13回：書評二校の査読（班外）
第14回：書評最終稿の採点（班外）
第15回：総括

ビブリオバトル

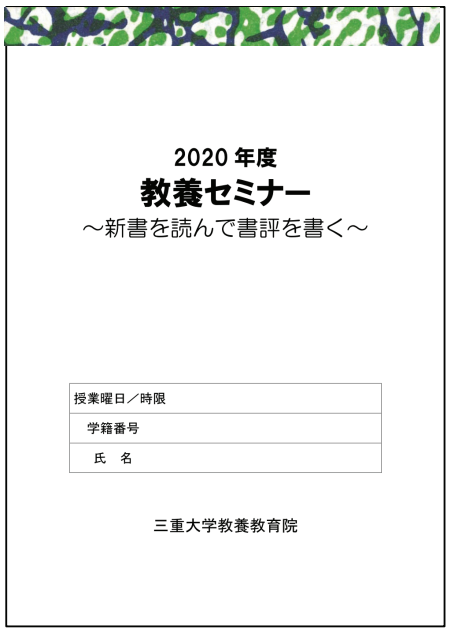
各自新書を読む⇒読書シート作成

ビブリオバトル方式

班で新書を読む⇒書評を書く



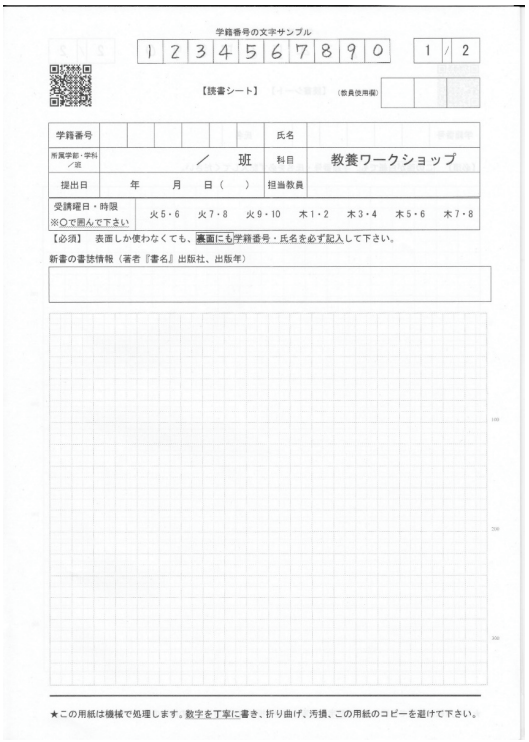
ワークシート集



2020 年度
教養セミナー
～新書を読んで書評を書く～

授業曜日／時限
学籍番号
氏　名

三重大学教養教育院



学籍番号の文字サンプル
1 2 3 4 5 6 7 8 9 0　1 / 2

【読書シート】（教員使用欄）

学籍番号		氏名	
所属学部・学科／班	／　班	科目	教養ワークショップ
提出日	年　月　日（　）	担当教員	
受講曜日・時限 ※○で囲んで下さい	火5・6　火7・8　火9・10　木1・2　木3・4　木5・6　木7・8		

【必須】　表面しか使わなくても、裏面にも学籍番号・氏名を必ず記入して下さい。

新書の書誌情報（著者『書名』出版社、出版年）

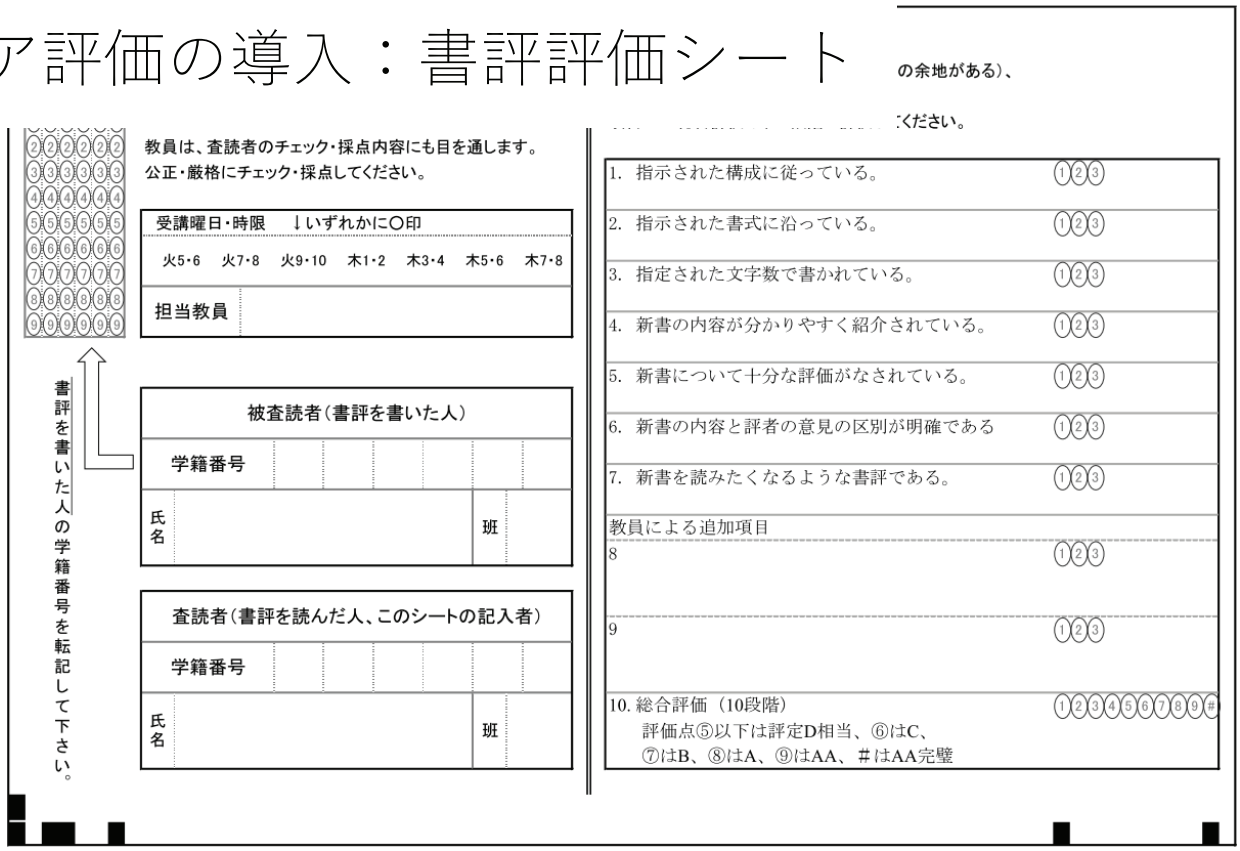
★この用紙は機械で処理します。数字を丁寧に書き、折り曲げ、汚損、この用紙のコピーを避けて下さい。

書評（論説文）の構成

2000字

1. 導入部
   - 本の概要、執筆の背景、著者
   目安：500～600字
2. 要約部
   - 全体の構成、要約、注目するべき部分
   目安：800～1000字
3. 論評部
   - 評者（学生自身）の本に対する評価
   目安：500～600字

ピア評価の導入：書評評価シート



教員は、査読者のチェック・採点内容にも目を通します。
公正・厳格にチェック・採点してください。

受講曜日・時限 ↓いずれかに○印						
火5・6	火7・8	火9・10	木1・2	木3・4	木5・6	木7・8
担当教員						

書評を書いた人の学籍番号を転記して下さい。

被査読者（書評を書いた人）		
学籍番号		
氏名		班

査読者（書評を読んだ人、このシートの記入者）		
学籍番号		
氏名		班

の余地がある）、

ください。

1. 指示された構成に従っている。	①②③
2. 指示された書式に沿っている。	①②③
3. 指定された文字数で書かれている。	①②③
4. 新書の内容が分かりやすく紹介されている。	①②③
5. 新書について十分な評価がなされている。	①②③
6. 新書の内容と評者の意見の区別が明確である	①②③
7. 新書を読みたくなるような書評である。	①②③
教員による追加項目	
8	①②③
9	①②③
10. 総合評価（10段階） 評価点⑤以下は評定D相当、⑥はC、 ⑦はB、⑧はA、⑨はAA、＃はAA完璧	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨＃

ピア評価：グループ活動(Moodle上)

グループ学習への貢献　【必須】

授業中のグループ学習において

- 司会、発表者、書記の役割を果たしているか
- 自分の意見を班員に積極的に提示しているか
- 班員の意見も尊重し、丁寧な議論を行っているか
- 本の内容について質問したり、答えたりしているか
- 書評の改訂に有用なコメントをし、受け入れているか　　など

グループ学習への貢献度を総合的に判断して、10段階（5＝不可、6＝可、7＝良（普通に良い）、8＝良～優、9＝優、10＝秀）で評価してください。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
115999 三重　太郎	○	○	○	○	○	○	◉	○	○	○
215999 伊勢　次郎	○	○	○	○	○	◉	○	○	○	○
315999 志摩　三郎	○	○	○	○	○	○	◉	○	○	○
415999 伊賀　司郎	○	○	○	○	○	○	○	◉	○	○
515999 紀州　五郎	○	○	○	○	○	○	◉	○	○	○

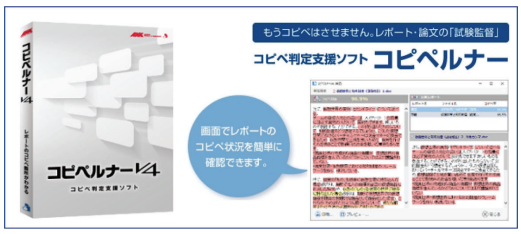
評価

成績評価方法と基準	読書シート30%、書評40%、グループ学習への貢献30%。教員による評価と、学生による相互評価に基づき、総合的な判定を行う。

評価対象／評価者	教員による評価	学生による相互評価	割合
読書シート	○	○	30%
書評	○	○	40%
グループ学習への貢献	○	○	30%

書評の作成において剽窃、盗用などの不正があれば単位を認めない。

最終版の書評はwordファイルの提出で、コピペ検索ソフト「コピペルナー」でチェックします。
ネットだけでなく、別クラスの友人・先輩のファイルとの相同性も検索されます。
　要するに、バレます。



12

3.
成果

『優秀書評集』の刊行

担当教員の評価により、各クラスから、優れた書評を一つずつ選抜

書評
- 1600～2000字
- 導入、紹介、批評の三部構成を指示

選ばれた本（優秀書評集　2020年度）

菅野仁『友だち幻想――人と人の〈つながり〉を考える』（筑摩書房、2008年）4件

宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』（新潮社、2019年）3件

原田隆之『入門犯罪心理学』（筑摩書房、2015年）3件

今井むつみ『学びとは何か――〈探究人〉になるために』（岩波書店、2016年）2件

森博嗣『孤独の価値』（幻冬舎、2014年）2件

選ばれた本（優秀書評集　過去の例）

2019年度：宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』（新潮社、2019年）４件

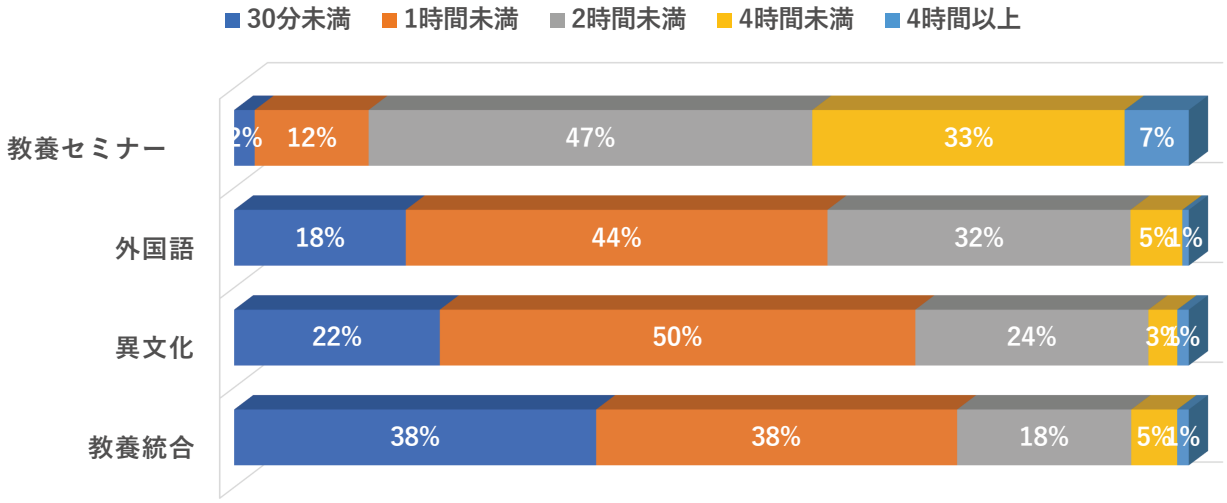
2018年度：宗田哲男『甘いもの中毒　ー私たちを蝕む「マイルド・ドラッグ」の正体』（朝日新聞出版、2018年）５件

2016年度：正高信男『考えない人　－ケータイ依存で退化した日本人』（中央公論新社、2005年）３件

2015年度：土井隆義『友だち地獄ー「空気を読む」世代のサバイバル』（筑摩書房、2008年）7件

アクティブ・ラーニング科目
自律的・能動的学修力の育成　授業外学修時間

2020年度後期　授業外学修時間



アクティブ・ラーニング科目
教養セミナー　学生アンケート（自由記述抜粋）

○　本を読むきっかけになった

・これまで 本を熟読したのが初めてで知識が増えるとともに本を読む重要性を感じることができました。

・本を読むことから遠ざかっていた中で、しっかりと一冊の本を読みこむことで自分の考えの変化や視界の広がりを感じることが出来ました。

○　本の読みこみ・批判的読解の上達

・この授業を受け、「本を評価しながら読む」という読み方を知りました。

・この授業を通して、批判的な目で物事を見る力が養われたと感じました。

・書評を書いたことで、批判しながら本を読んだり、著者の主張をより明確に読み取ったりする練習ができて、本の読み方の幅が広がりました。

・この授業で本を読む機会だけでなく、本の内容について議論する機会を設けていただけた事がよかったです。

アクティブ・ラーニング科目
教養セミナー　学生アンケート（自由記述抜粋）

○　文の書き方が上達した・達成感を感じた

・書評を書く中で、自分の述べていきたい結論に導くために要約したり、著者の考えを引用するなどして論理的に文章を書いていく力を以前より身につけられたように感じました。

.毎回いろんな人に書評を見てもらい、評価やアドバイスをもらって自分の書評がどんどん改良されていくことに喜びを感じ、非常に有意義な時間を過ごせたと思いました。

○　考え方の違いに触れられた

・同じ新書を読んでも着眼点や批判する点が違っていて、自分一人で本を読むよりも多くのことを学ぶことが出来てとても面白いと思った。

・同じ本でも評者や取り出す部分によって本に対する印象が変わって面白かったです。

・同じ本をみんなで読むことで、自分との考え方の違いを比較することができたのが面白いと思った。

アクティブ・ラーニング科目
教養セミナー　学生アンケート（自由記述抜粋）

○　アドバイスし合って成長できた

・グループ活動においてしっかりと時間内に話し合いながら進めていくことを経験し、身に付けていけたので良かったです。加えて、グループ活動や査読ゲームなどを通して、他の人からの意見を聞き、それを受け止めて次に生かしていくことを学んでいけたのもすごく良かったです。

・欠点を指摘することが苦手だった私でしたが、この講義でむしろ相手のためになっていることに気づき、今後他の講義や生活などあらゆる社会の中で役立てようと思いました。

・グループの仲間で意見交流を行うことで、より客観的に自分の苦手な部分や良いところが見え、成長することができたと思いました。

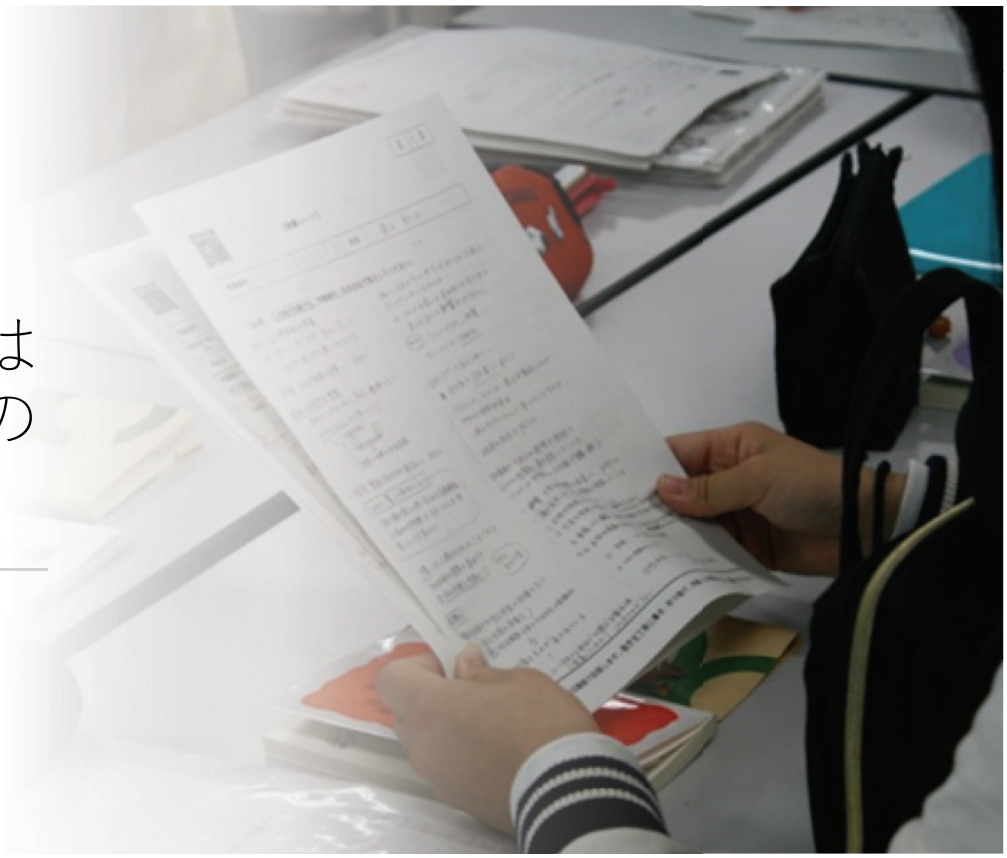
○　コミュニケーションを取り合って進められた

・他の学生の意見を多く聞き、また自分の意見を積極的に述べる時間は楽しかった。

・グループで自由度の高い活動ができたので、学生同士緊張せずに話し合いをしやすく、自分の意見も言いやすかった。

・グループ全員で協力して、互いに高めあえるように毎回楽しい雰囲気で活動できた。

4.
教養セミナーは何をめざしたのか



何をめざしたのか

- 本を読ませること
  自分なりのことばで要約することができるようになる。
  批判的に読むことができるようになる。

- 他人と議論すること（グループワーク）
  他者の視点を持てるようになる。

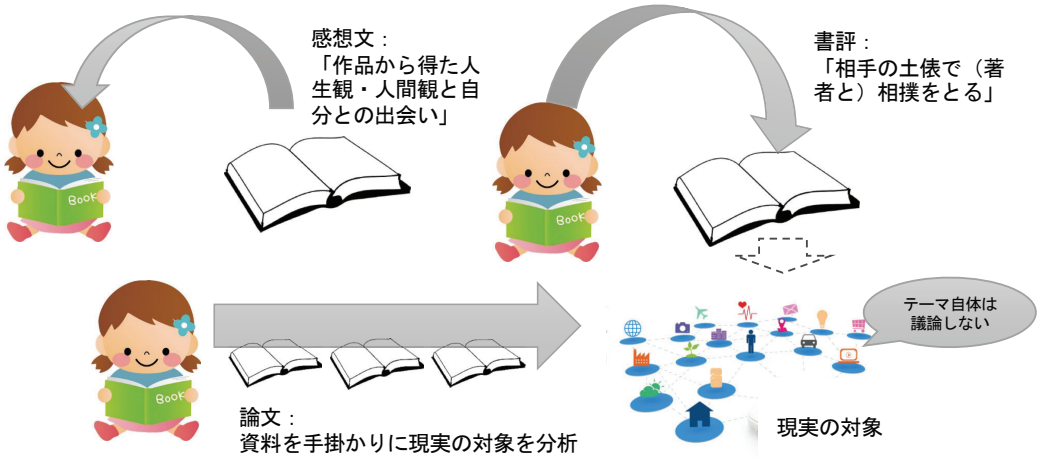
- 人に読ませることのできる文章が書けること
  読者を意識し、何度も推敲することを覚える。

なぜ書評なのか（私見）

１）内容をきちんと理解してまとめるため
２）広い読み手（アウトプット）を意識するため
３）的外れな論評にならないようにするため
４）議論できるようにするため
５）論文だとテーマによっては教員が内容的に指導できない

⇒本来の”書評”ではない！
「教育のための書評」

「書評」は感想文・論文とはどう違うのか（私見）



外部評価

「教養部」とその後様々な形でその機能を継承した教養教育実施組織は、教員側の「専門家主義」化と学生側の「大衆」化との間の以上のような根深い歴史的起源をもつギャップを埋める上で重要な役割を果たしてきた。大学の内部からその過度な「専門家主義」化を正すという役割である。三重大学における教養教育カリキュラムの他大学には見られない特徴である「教養ワークショップ」はその代表的な実例であると言ってよい。「読む」という行為は教養教育にも専門分野の研究にも共通の行為であるが、専門分野を異にする学生同士が自らの専門分野にとらわれずに選んだ本を互いに「批評」し合うというこの授業のコンセプトは、同じ本が常に異なった「読み」に対して開かれており、かつそれらの異なった「読み」のそれぞれが、決して個々人の主観的な「感想」に還元されるものではないことを知るところにある。（2021年度三重大学教養教育院自己点検・評価に対する評価結果：石井潔前静岡大学学長）

さいごに

さらに詳しい書評のあり方については

『三重大学教養教育院　自己点検・評価書』資料編
「教養セミナーの『書評』はどうあるべきか（抜粋）」

をご覧ください。

『三重大学教養教育の軌跡　―理念・カリキュラム・組織―』（三重大学教養教育院）

もまもなく発行予定です。

この報告に対する問い合わせ先： inokuchi@ars.mie-u.ac.jp

三重大学教養教育PBLセミナーについて

三重大学教養教育院 副院長
綾野　誠紀

本報告のながれ

1．PBLセミナーの導入と問題点
2．PBLセミナーの見直し
3．現在のPBLセミナーについて
4．実績と問題点について

PBLセミナーの導入

2006年度から共通教育に導入された。

定義：問題発見・解決およびプロジェクトの遂行を通して、学習に対する動機づけを高め、グループワークを経て発表まで到達する集中的な少人数セミナー

特徴：半期週2回の授業4単位（うち1回（水曜日9・10限（16:20-17:50））は、学生による自主学習（TAの補助付）

初年度開講PBLセミナー：計25セミナー

共通教育PBLセミナーの導入（2006年度）計25セミナー

主題A「社会のしくみ」
- 21世紀の日本社会の抱える問題
- 社会的諸課題とその解決方法の検討
- 江戸時代の旅の法則を探る
  —「道中日記」を読んでみよう—
- ディベートで学ぶ平和学
- 創造性開発法
- 考古学調査入門
- 社会における法的問題の考察

主題B「感性をみがく言語と芸術」
- ディベートによる論理的思考能力の向上
- コンテを使って文章を書こう

主題C「情報化社会と数理科学」
- 数学の歴史
- パラドックス
- 解熱剤と葛根湯
- 創造性開発法

主題D「自然は生きている」
- 地域災害論

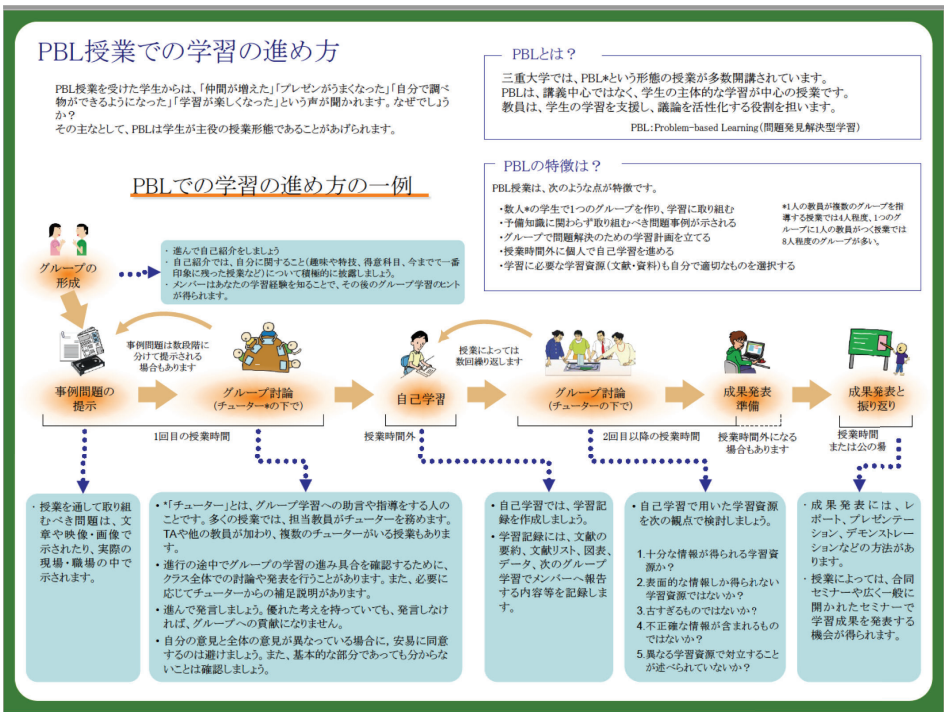
主題E「国際理解と異文化接触」
- 日本文化再考
- 文化の法則を探る
- ヨーロッパ調査旅行を計画する

主題F「心と体を見つめなおす」
- 心の法則発見
- こころの法則発見
- 食の文化と健康
- 記憶の期限をさぐる

主題G「環境問題と人間社会」
- ISO学
- 災害論：身近な災害を知ろう
- 新しい環境管理

主題I「創造と知的財産」
- 創造性開発法

2008年作成のPBLセミナーに関する案内



教養教育カリキュラムでのPBLセミナー

2015年度から教養教育の教養統合科目に位置付けられた。

1．教員からの申請によりPBLセミナーとして開講ができるようにした。

2．共通教育時代同様に、授業の最終回を公開発表会として公開することとした。

3．半期週2回の授業4単位（うち1回（水曜日9・10限）は、学生による自主学習（TAの補助付）の制度は維持した。

教養教育　共通カリキュラム

	領域	科目	必修	選択
教養基盤科目	アクティブ・ラーニング	スタートアップセミナー（前期）	2	
		教養ワークショップ（後期）	2	
	外国語教育	英語	6	
	異文化理解	異文化理解基礎	2	
		異文化理解演習	2	
	健康科学	スポーツ健康科学	2	
教養統合科目	地域理解・日本理解		2	2
	国際理解・現代社会理解		4	
	現代科学理解		2	
合計			26	

各科目にPBLセミナーを開講可

教養教育PBLセミナーの見直し

1．教養教育院のFDの一環として教養教育院所属の教員で公開発表会を見学した結果、果たしてPBL形式で実施されているのかどうか不明な授業が複数あった。

2．TAの申請がないPBLセミナーがあり、学生の自主的学習が確保されているかどうか疑わしいものがあった。

3．教員不在の1コマも含めて4単位認定していいのか。

4．教養統合科目の必修10単位のうち4単位を一つのPBLセミナーで占めていいのかという問題指摘があった。

教養教育PBLセミナーの見直し（2018年度から）

1．週1コマ2単位にする。

2．教養教育PBLセミナーの要件を設定する

①授業担当教員はPBLセミナー事前打ち合わせに参加すること
②授業を開放し、他の教員の授業参観が行えるようにすること
③授業担当教員は他のPBLセミナーの授業参観を行うこと
④公開の発表会を行うこと
⑤合同成果公開に協力すること

教養教育PBLセミナーの見直し

1．PBLセミナーの事前打ち合わせ（ 教養教育院11月FD・SD研修会） ※PBL開講計画書とシラバスについて全学のPBL推進プロジェクトの代表がコメントし、意見交換を行う。

2．授業参観（授業期間中）

3．公開発表会（学期の最終回）

4．最優秀発表のポスター展示（PBLラウンジ）

5．院長賞決定、授与式＆交流会

PBLセミナー事前打ち合わせ会

ポスターへのコメント（院長賞授与式）

教養教育PBLセミナーの見直し（2018年度から）

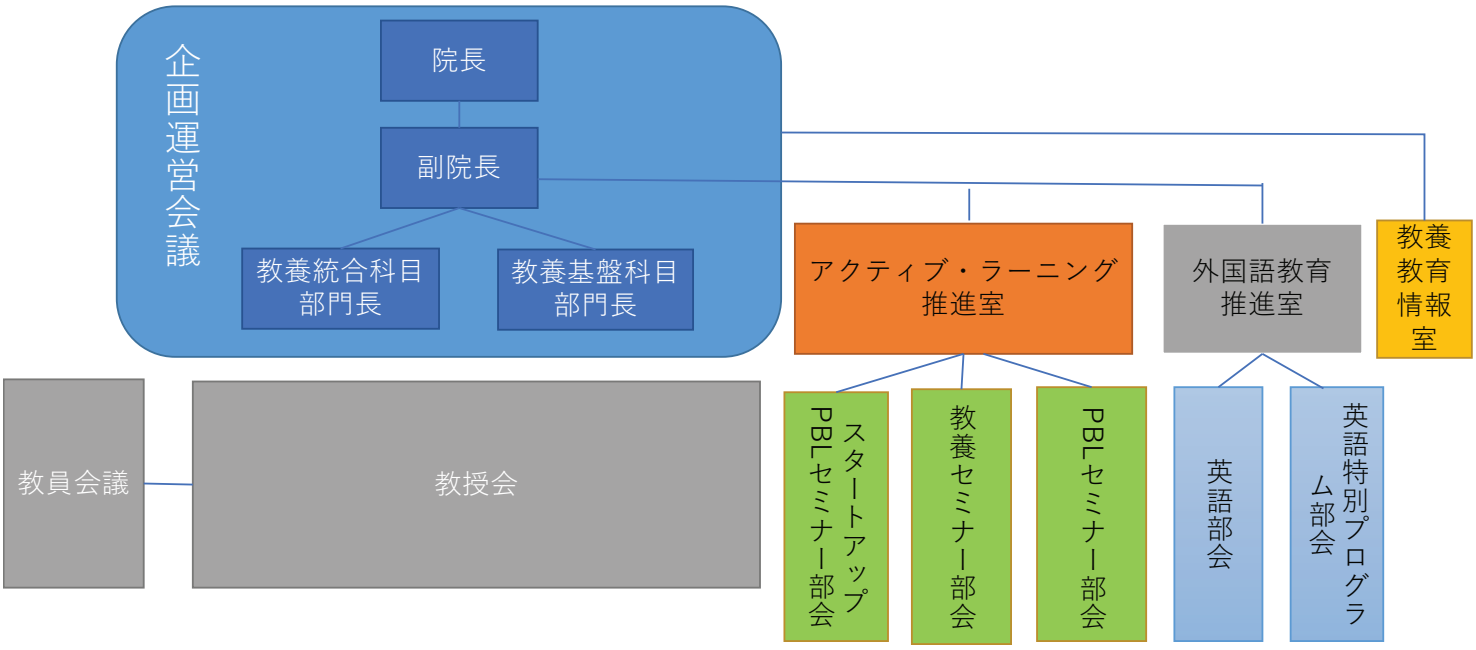
１型PBLセミナー：問題にもとづく学び型セミナー (Problem-Based Learning)

- 具体的な事象から問題の所在（もしくは課題）を明らかにさせ、学生の自律的･能動的な学習およびグループ学習を通してその解決を求めさせるセミナー

２型PBLセミナー：プロジェクトにもとづく学び型セミナー (Project-Based Learning)

- 特定の課題設定に基づき、その課題の解決や達成に向けてグループ学習を通しプロジェクトを遂行するセミナー

教養教育院内のカリキュラム運営体制



2021年度の教養教育PBLセミナー

科目名	授業テーマ
PBL言語学（国際・現代）	小学校英語を科学する
PBL言語学（国際・現代）	ユニークな辞典を作る
PBL政治学（地域・日本）	日本の政治と外交
PBL数理科学（現代科学）	身近な微分積分の発見
PBL医学・看護学（現代科学）	味と匂の生理学
PBL医学・看護学（現代科学）	健康食品の機能と現状
PBL現代科学理解特殊講義（現代科学）	現代の科学と技術
PBL自然科学概論（現代科学）	科学の歴史
PBL環境科学（現代科学）	景観を創る
PBL社会学（国際・現代）	メディアとジェンダー

（計17セミナー）

新入生用リーフレット

教養教育PBLセミナーの例（社会学）

ＰＢＬ社会学（国際・現代）「メディアとジェンダー」

1．プロジェクトの内容

社会学の仮説検証について、様々なメディアで描かれる男女像を用いて学ぶ。

2．プロジェクト例

プリキュアとセーラムーンSuperSを題材に用いることにより、男女像の変化について、社会の変化に伴う変化（主導仮説）と送り手の都合の変化（拮抗仮説）の双方から検討し、未だにステレオタイプ的な男女像を描く作品があることに基づき後者を棄却した。

教養教育PBLセミナーの例（医学・看護学）

ＰＢＬ医学・看護学（現代科学）「健康食品の機能と現状」

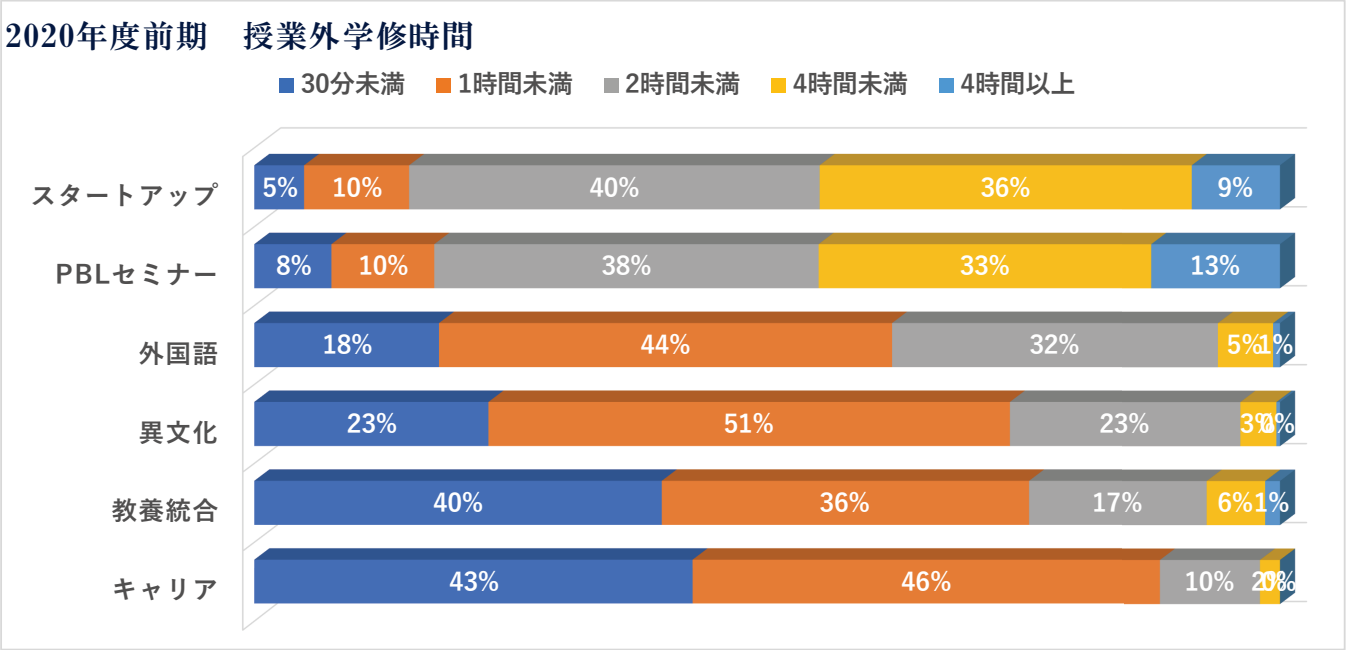
1．プロジェクトの内容

健康食品に関して、①調査を行い、②課題を発見し、③解決策を考え、④発表する。

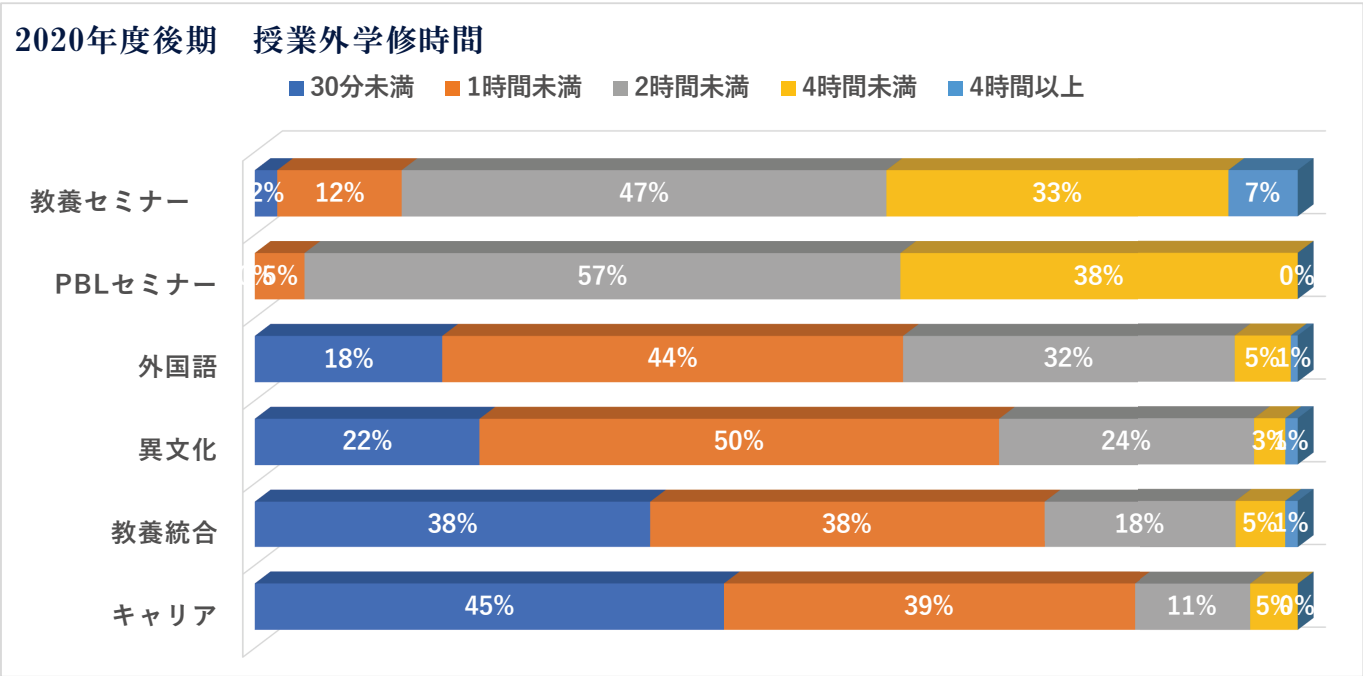
2．プロジェクト例

機能性表示食品アクエリアスS-Bodyに含まれる脂肪代謝促進作用のある成分に関する文献を読み、先行研究の疑問・問題点を洗い出し、アクエリアスS-Bodyを用いた脂肪代謝促進作用の実験計画を立案した（コロナ禍により実験は行なっていない）。

PBLセミナーの授業外学修時間（2020年度前期）



PBLセミナーの授業外学修時間（2020年度後期）



PBLセミナーの履修者数（2021年度）

ＰＢＬ医学・看護学（現代科学）	8
ＰＢＬ現代科学理解特殊講義（現代科学）	15
ＰＢＬ現代科学理解特殊講義（現代科学）	7
ＰＢＬ医学・看護学（現代科学）	12
ＰＢＬ数理科学（現代科学）	17
ＰＢＬ医学・看護学（現代科学）	10
ＰＢＬ政治学（地域・日本）	5
ＰＢＬ医学・看護学（現代科学）	3
ＰＢＬ医学・看護学（現代科学）	3
ＰＢＬ政治学（地域・日本）	8
ＰＢＬ自然科学概論（現代科学）	9
ＰＢＬ自然科学概論（現代科学）	4
ＰＢＬ医学・看護学（現代科学）	9
ＰＢＬ言語学（国際・現代）	3
ＰＢＬ環境科学（現代科学）	3
ＰＢＬ社会学（国際・現代）	7
ＰＢＬ言語学（国際・現代）	12
履修者数平均	7.9

参考：教養統合科目
平均履修者数約40人

2021年度前期受講者アンケート結果

	当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらとも言えない	やや当てはまる	当てはまる	平均
1. 授業の到達目標と評価基準が明確であった。	0	2	1	29	50	4.5
2. 授業の大部分が自主的な活動だった。	0	0	3	9	70	4.8
3. 研究や問題探求の方法と流れ（課題設定から発表まで）が理解できた。	0	0	3	24	54	4.6
4. グループで活動することを通じて、一人だけでは学べないことを学ぶことができた。	1	1	4	11	65	4.6
5. 自分の考えを根拠とともに他者に伝える能力が向上した。	1	0	2	39	40	4.4
6. 失敗を糧にする姿勢が身についた。	1	1	13	29	38	4.2
7. 大学での研究・勉強への意欲が向上した。2	1	2	12	35	32	4.1
8. 総合的に成長が実感できた。友達や後輩に勧めたい。	1	1	12	27	41	4.3

ご静聴ありがとうございました。

三重大学
異文化理解の導入と実際

富山大学　2022年2月2日

三重大学名誉教授・元教養教育機構長　井口　靖

1.
異文化理解の概要

教養教育共通カリキュラムの理念

自律的・能動的学修力の育成

→ アクティブ・ラーニング

グローバル化に対応できる人材の育成

→ 外国語（英語）・異文化理解など

教養教育　共通カリキュラム

	領域	科目	必修	選択
教養基盤科目	アクティブ・ラーニング	スタートアップPBLセミナー（前期）	2	
		教養セミナー（後期）	2	
	外国語教育	英語	6	
	異文化理解	異文化理解基礎	2	
		異文化理解演習	2	
	健康科学	スポーツ健康科学	2	
	キャリア教育		(2)	
教養統合科目	地域理解・日本理解		2	2*
	国際理解・現代社会理解		4	
	現代科学理解		2	
合計			26	

*はキャリア教育の科目２単位で置き換えることができる。

異文化理解科目

異文化理解（ドイツ語）	クラス指定
異文化理解（フランス語）	クラス指定
異文化理解（中国語）	クラス指定
異文化理解（朝鮮語）	週２コマ
異文化理解（ロシア語）	週２コマ
異文化理解（スペイン語）	週２コマ
異文化理解（ポルトガル語）	週６コマ

１年次前期	１年次後期
異文化理解Ⅰ基礎a(1)	異文化理解Ⅰ基礎b(1)
異文化理解Ⅰ演習a(1)	異文化理解Ⅰ演習b(1)

（カッコ内は単位数）

異文化理解科目の選択

2.
「異文化理解」の誕生

第二外国語から未習外国語へ、
そして・・・

1975年度外国語履修単位（一般教育時代）

学部	学科	第1外国語	第２外国語
教育学部		8（1言語）	
医学部	医学科	8	8（ドイツ語）
工学部		8（英語orドイツ語）	6 （英語orドイツ語）
農学部		8（1言語）	
水産学部		8（英語）	

1983年度（人文学部創設）外国語履修単位

学部	学科	第1外国語	第２外国語
人文学部	文化学科	8	4
	社会科学科	8	4
教育学部		8	4
医学部	医学科	8	8（ドイツ語）
工学部		8	4
農学部		8	4
水産学部		8	4

2014年度（現カリキュラム直前）外国語履修単位（共通教育時代）

学部	学科	既習外国語	未習外国語
人文学部	文化学科	6	8
	社会科学科	6	4
教育学部		8	
医学部	医学科	6	4
	看護学科	6	2
工学部		6	4
	電気電子工学科	6	2
生物資源学部		6	4

「異文化理解」の理念

- 英語はコミュニケーションの手段としての言語であるが、それと並行して必要なのは自分たちと異なる価値観、視点、考え方があることを学ぶことである。上でも述べたように、真にグローバルな人財とは、世界的視野で物事を考えるとともに、 多様な個別文化も理解できる眼を持つ人財であり、異文化を知ることはグローバル化にと って欠くことのできないものであると言えよう。
- 英語による一極化に陥ることなく、アジアやヨーロッパなどにおける多様性にも目を向け、従来とは異なった価値 観、視点、考え方などを獲得することは今後の国際人にとって極めて重要である。そのために異文化理解という意味で英語以外の外国語を学ぶ意味は大きいと考えられる。異文化理解科目としては、従来のように単に初級文法を学ぶだけではなく、同時に多様な文化の 社会的背景やそれぞれの国の現状を学べるようにする工夫が必要である。

教養教育カリキュラム等検討委員会「新しい教養教育カリキュラム等について」（2012 年 12 月 25 日）

他大学の状況（初修・未習外国語必修単位）

大学	文系	理系
北海道大学	4-8	4
弘前大学	0	
岩手大学	0-8	
東北大学	6	4
福島大学	0	
茨城大学	2-4	0
宇都宮大学	国際学部のみ２科目各１	0
東京大学	6	6
金沢大学	8（一部除く）	0
山梨大学	4（1科目2単位）	
信州大学	8（一部）	0
岐阜大学	2	
静岡大学	1-2（一部除く）	

平成30年度国立大学教養教育実施組織会議第一分科会協議題「共通教育における初修外国語科目（第二外国語）について」より

他大学の状況（初修・未習外国語必修単位）

大学	文系	理系
名古屋大学	10（1科目1.5-2単位）	6（1科目1.5-2単位）
京都大学	12-16（1科目2単位?）	8（1科目2単位?）
大阪大学	4	3
神戸大学	4-5	
鳥取大学	4	2
島根大学	4	2-4
岡山大学	4（一部）	6（一部）
広島大学	0-6	
徳島大学	2-4	
愛媛大学	0	
高知大学	0	
佐賀大学	0	
長崎大学	2-4	

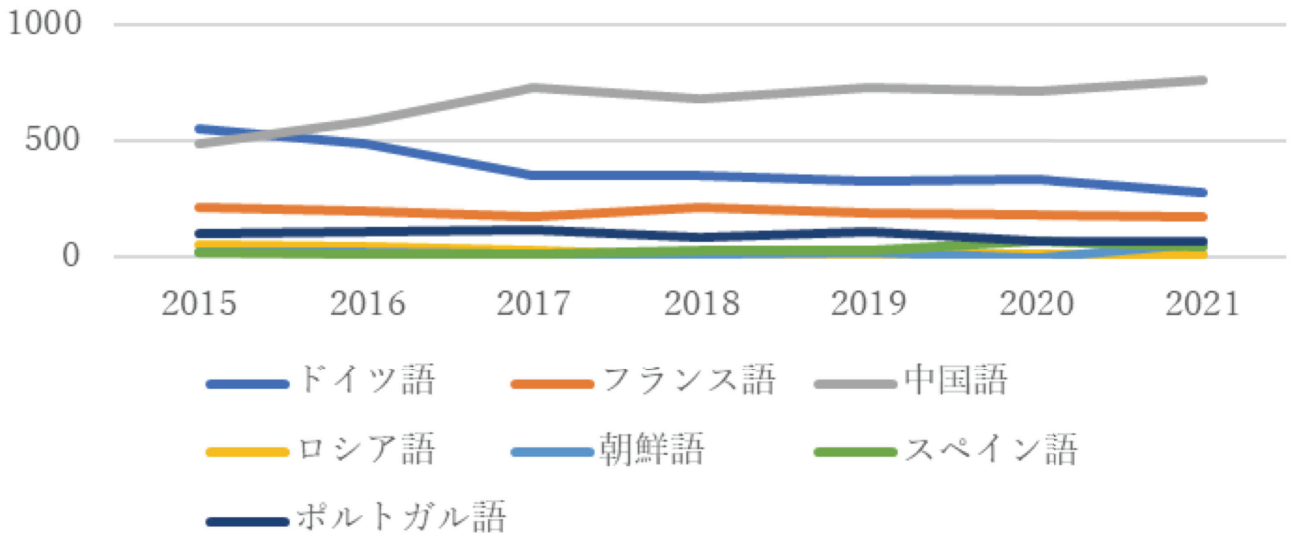
平成30年度国立大学教養教育実施組織会議第一分科会協議題「共通教育における初修外国語科目（第二外国語）について」より

特にドイツ語の共通教科書の試みについて

3. 現状と成果

異文化理解（ドイツ語）共通教科書

異文化理解各言語の履修状況

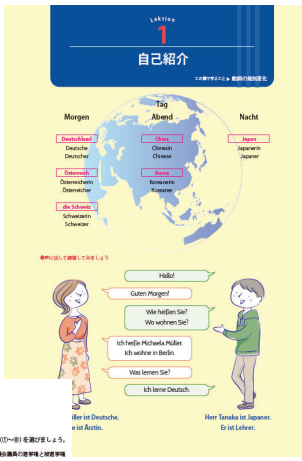


前期異文化理解基礎の履修登録者数で集計

ドイツ語共通教科書への道　2020

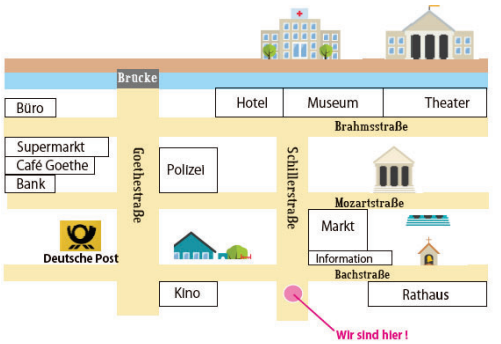
『Dreiklang』各課の構成

- 導入
- Grammatik（キーセンテンス）
- Sprechen（文法練習）
- Wortschatz（50語）
- Partnerübung（会話練習）
- Landeskunde（文化）
- Lesen（テキスト）



『Dreiklang』各課テーマ

課	テーマ
0	あいさつ
1	自己紹介
2	趣味・余暇
3	持ち物・食べ物
4	家族・住居
5	自然・心身
6	街歩き
7	交通
8	予定・計画
9	学校
10	過去のできごと
11	祝祭
12	政治・社会



1. 上の地図を見ながら、行きたい場所をパートナーに聞いてみましょう。聞かれた方は、会話例を参考に、パートナーに道を案内してみてください。

会話例：

A Wie komme ich zur Post?

B Gehen Sie nach links und die Bachstraße geradeaus. Die Post ist auf der rechten Seite*.

*Auf der rechten (linken) Seite 右側（左側）に

ドイツ語オンライン・ハイブリッド授業

年度	科目	授業方法	担当	課題	指導
2020年度前期	基礎	ビデオ（全体共通）		Moodle（共通で作成）	各担当者
2020年度前期	演習	ライブ配信（時間帯共通）	専任・特任	Moodle（共通で作成）	各担当者
2020年度後期	基礎	ライブ配信	各担当者	Moodle（共通で作成）	各担当者
2020年度後期	演習	ライブ配信	各担当者	Moodle（共通で作成）	各担当者

第６回５月２５日（演習）Lektion 2

〇本日の授業内容

・前回課題の確認

・Wortschatz 2(p.25): 飲食、持ち物、形容詞

・名詞の格変化の練習

〇次の手順で受講してください

1）それぞれの授業時間になったら、Zoomによる「ライブ授業」を受け

2）授業後、Wortschatz 2の「飲食」「持ち物」「形容詞」を覚えてく
「語彙練習」をクリックして覚えているかどうか試してください。単語
たところがある場合には授業が終わったあとで何度でも練習することが

3）テキスト28ページLesen 2を読んで（　　）内から正しい語を選
合っていますか？ Richtig（正しい）とFalsch（間違っている），あて
Lesen 2をクリックし、この時間内に解答してください。

4）テキスト26ページPartnerübungの表で、ドイツ語の単語や文を見

・下の「課題提出用ファイル」をクリックし、Wordファイルをダウンロ

・解答を記入してください。自分のパソコンに保存してください。

・下の「課題提出」をクリックし、「提出物を入力・アップロードする
ださい。これはこの授業時間内に終了してください。提出時刻は記録さ

5）今回は語彙の自習問題を用意しています。ぜひやってみましょう。

5月２５日（演習）語彙練習

ここをクリックし、「問題を受験する」をクリックしてください。

5月２５日（演習）Lesen 2(p.28)

ここをクリックし、「問題を受験する」をクリックしてください。「テスト終了」まで行い、最後に必ず「すべてを送信して終了する」をクリックしてください。

5月２５日（演習）課題提出用ファイル

利用制限 **2021年 05月 25日** より利用可

ここをクリックして課題提出用のWordファイルをダウンロードします。

5月２５日（演習）課題提出

ここをクリックし、「提出物を入力・アップロードする」をクリックしてファイルをドラッグアンドドロップしてください。

音声ファイル：語彙リスト２(p.25)

音声ファイル：Lesen 2(p.28)

【自習問題】5月25日（演習）別冊語彙練習(別冊p.5　語彙2から)

これは課題ではありませんが、楽しく自習できるようになっています。ぜひ挑戦してみてください。終了日時はありません。

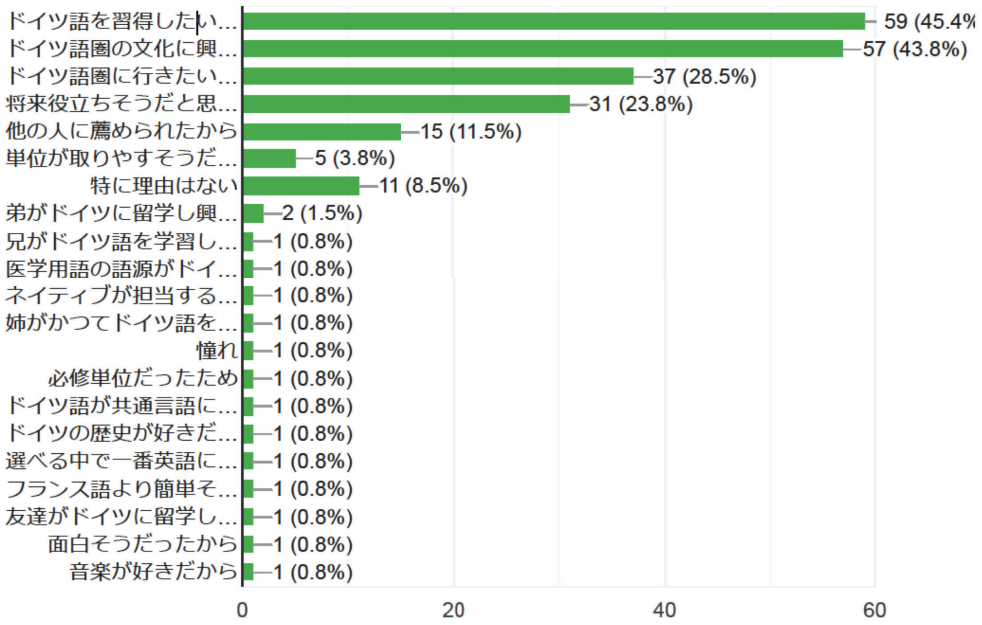
ドイツ語オンライン・ハイブリッド授業

年度	科目	授業方法	担当	課題	指導
2021年度前期	基礎	ライブ配信	各担当者	Moodle（共通で作成）	各担当者
2021年度前期	演習	ライブ配信	各担当者	Moodle（共通で作成）	各担当者
2021年度後期	基礎	ハイブリッド	各担当者	Moodle（共通で作成）	各担当者
2021年度後期	演習	ハイブリッド	各担当者	Moodle（共通で作成）	各担当者

アンケート

異文化理解（ドイツ語）を選んだ理由は何ですか。（複数解答可；「その他」を選んだら、理由を記入してください）

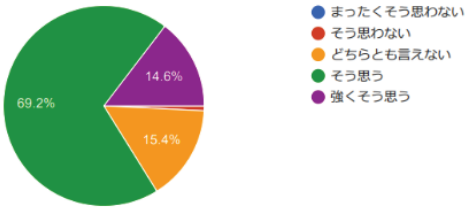
130 件の回答



アンケート

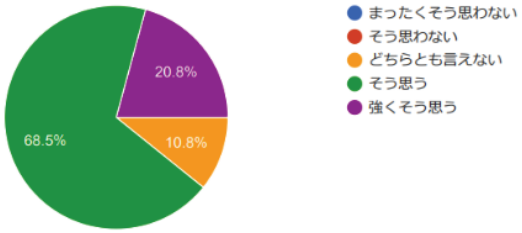
「共通教科書（ドライクラング）」は全体として満足できる内容ですか。

130 件の回答



「共通教科書」を通じて，ドイツ語圏の文化に興味を持ちましたか。

130 件の回答



さいごに

- 教養教育は必要なのか、何のためにするのか。
- 教養教育で何を教えるのか。
- その中で、第２外国語・未習（初修）外国語・異文化理解はどうあるべきか。

お問い合わせ： inokuchi@ars.mie-u.ac.jp

令和３年度第３回教養教育院ＦＤ実施計画

テーマ：「先進事例に学ぶ教養教育～PBL と異文化理解～」

１．開催趣旨

本 FD 研修会は「先進事例に学ぶ教養教育」と題し，教養教育において PBL を広く展開している三重大学の先生方を講師として招き，PBL の導入とその実際について学んでいきます。また，グローバル化に対応できる人材の育成に向けて「異文化理解」をコンセプトとした科目を導入しており，その様子についても紹介してもらいます。講演に加えてパネルディスカッションを行うことで，教養教育への高度なアクティブラーニングの拡大等について考えていきたいと思います。

２．開催日時

令和４年２月２日（水）13：30～15：50（予定）

３．開催会場

（オンライン）Zoom を使用したオンラインミーティング形式

（対面）五福キャンパス共通教育棟４階 A42 番教室

４．対　　象

本学教職員，非常勤講師，学生

５．次　　第

（１）開会挨拶・趣旨説明　彦坂　泰正（教養教育院）　【13:30～13:35】

（２）三重大学での PBL の導入と実際　【13:35～14:45】

①「PBL の開発と導入」　山田　康彦　氏（三重大学教育学部特任教授）

②「スタートアップセミナー」　長濱　文与　氏（三重大学教養教育院准教授）

③「教養セミナー」　井口　靖　氏（三重大学名誉教授）

④「PBL セミナー（教養教育）」　綾野　誠紀　氏（三重大学教養教育院副院長）

（３）三重大学の異文化理解の導入と実際　【14:45～15:05】

「異文化理解」　井口　靖　氏（三重大学名誉教授）

～　休憩（５分）　～

（４）パネルディスカッション　【15:10～15:45】

司会進行・質疑コーディネート：教養教育院教員

（５）閉会挨拶　武山　良三（教養教育院長）　【15:45～15:50】

令和3年度第3回教養教育院FD
「先進事例に学ぶ教養教育～PBLと異文化理解～」参加状況

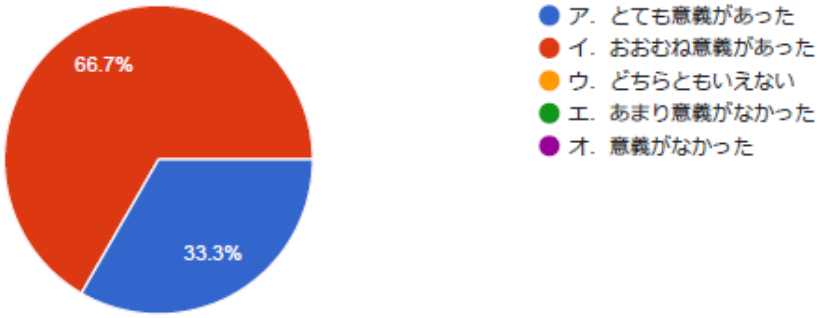
所属部局等	参加人数
理事	1
教養教育院	13
人文学部	1
都市デザイン学部	3
薬学部	1
教育・学生支援機構	1
国際機構	2
研究推進機構	2
総合情報基盤センター	2
職員	2
合計	28

令和３年度第３回教養教育院 FD 参加者アンケート集計結果（2/3 時点）

FD 参加者数：28 名（内訳：常勤教員 26 名，職員２名）
参加者アンケート回答数：6

１．今回の教養教育院FDに参加しての評価を次の中から選んでください。

6 件の回答



２．今回の教養教育院 FD についての感想やご意見があれば、ご記入ください。
（1 件の回答）

今後の授業で取り入れたい内容が多くあった。1 年生だけでなく，他の学年でも教養教育院の取り組みがあるのなら聞きたいと思いました。

３．今後、教養教育院 FD で取り上げて欲しいとお考えのテーマがあれば、ご記入ください。
（0 件の回答）

富山大学教養教育院　FD活動報告
令和３年度第３回FD研修会

教養教育院教育改善検討ワーキンググループ
座長：彦坂　泰正
上田理恵子
谷井　一郎
福田　翔
水野真理子
大橋　隼人